
地域福祉計画・地域福祉実践計画策定にかかる
いつまでも住み続けられるまち 住民アンケート調査
調査結果報告書

令和元年 9 月

鷹栖町・鷹栖町社会福祉協議会

北星学園大学 畑 亮輔 准教授

目次

| | |
|-----------------------------|----|
| 1. 調査の概要 | 2 |
| (1) 調査の目的..... | 2 |
| (2) 調査方法..... | 2 |
| (3) 回収状況..... | 2 |
| (4) 本報告書中の記号 | 2 |
| (5) 過去に実施した調査との比較について | 2 |
| 2. 調査結果の概要（全世帯版） | 3 |
| 3. 調査結果（全世帯版） | 6 |
| 4. 調査結果の概要（中学生版） | 27 |
| 5. 調査結果（中学生版） | 30 |
| 6. 資料 | |
| (1) アンケート調査票（全世帯版） | |
| (2) アンケート調査票（中学生版） | |

1. 調査の概要

(1) 調査の目的

令和2年度から令和6年度を計画期間とする「第1期鷹栖町地域福祉計画」及び「第2期鷹栖町地域福祉実践計画」の策定に当り、鷹栖町の生活課題を明らかにし、その解決のために必要となる施策や目標を設定するための基礎資料とするために実施した。

(2) 調査方法

■調査地域 鷹栖町全域

■調査対象

- ①全世帯版・・・平成31年3月1日現在において鷹栖町に居住する広報配布世帯及び広報未配布世帯のうち居住を把握している2,511世帯。
- ②中学生版・・・令和元年6月17日現在において鷹栖中学校に在籍している242名の生徒。

■調査時期

- ①全世帯版・・・平成31年3月5日（火）～平成31年3月31日（日）
- ②中学生版・・・令和元年6月17日（月）～令和元年6月28日（金）

(3) 回収状況

| | | |
|--------|--------------|-------------|
| ■配布数 | ①全世帯版 2,511票 | ②中学生版 242票 |
| ■有効回収数 | ①全世帯版 1,829票 | ②中学生版 195票 |
| ■有効回収率 | ①全世帯版 72.8% | ②中学生版 80.5% |

(4) 本報告書中の記号

- ①S A・・・単一回答（Single Answer）の略。選択回答は1項目のみ。
- ②M A・・・複数回答（Multi Answer）の略。回答する選択肢の数に制限がある。

(5) 過去に実施した調査との比較について

報告書の中で、過去に実施した調査結果の記載がある。調査結果については平成25年3月に実施した「お互い様づくり行動計画」及び「第1期鷹栖町地域福祉実践計画」策定のための「助け合い・支え合い」住民アンケートのものであり、報告書中では「平成24年度調査」と記載する。

2. 調査結果の概要（全世帯版）

■分析検証：北星学園大学 社会福祉学部 福祉臨床学科 准教授 畑 亮輔 氏

（1）はじめに

本報告書は、町の地域生活課題を明らかにし、その解決のために必要となる施策や目標を設定する「鷹栖町地域福祉計画」と、鷹栖町社会福祉協議会が目指す福祉でまちづくりを示す「鷹栖町地域福祉実践計画」の作成に向けて、鷹栖町の状況に関する基礎資料を得ることを目的に鷹栖町の全世帯を対象に実施した「いつまでも住み続けられるまち 住民アンケート（平成31年3月実施）」の調査・分析結果をまとめたものである。

本報告書では平成25年3月に実施した前回調査との比較も含めながら、「鷹栖町に住み続けることへの意識」、「地域における付き合い」、「活動への参加状況」、「生活上の悩みや不安・必要な支援」、「住民同士の支え合い活動」、「組織・団体の認知度」を整理した上で、「いつまでも住み続けられるまち 鷹栖町」に向けた課題や方向性について提示する。

（2）鷹栖町に住み続けることへの意識

「いつまでも住み続けられるまち」に向けて、まず8割を超える「住み続けたい」と回答した方たちが住み続けられる、また「住み続けたい」という思いを持ち続けられるようなまちづくりを進めていくことが重要である。また、将来「札幌等の利便性の高い地域で暮らしたい」という気持ちや、「子どもの住んでいる地域で暮らしたい」という気持ちは住民の意向として尊重すべきものだが、今の生活や将来に悩みや不安が多いという可能性もあるため、住民の悩みや不安をしっかりと把握していくことが必要である。

（3）地域における付き合い

地域における住民同士の付き合いやつながり、信頼感、そして社会参加行動は、ソーシャルキャピタル（社会関係資本）を構成するものとして考えられている。地域においてこれらが豊かな場合には、健康が増進されたり、教育（体験）の機会が多くなったり、また犯罪発生率が低下するなど、人々の生活に良い影響を与えることが知られている。

鷹栖町では従来地域住民のつながり・絆が強いまちであることが一つの特徴であったが、平成24年度に実施した調査では住民の地域活動への積極的な参加が低下していることから、となり近所や町内会における活動の活発化が課題であることを明らかにした。

今回の調査において、となり近所ではないにしても、町内での親しい付き合いを有している住民が7割以上もいることは、今後の住み続けられるまちづくりに向けて着目すべき点と考える。つまり、となり近所での付き合いが重要なながらもそこに限定せずに、町に親しく付き合いをしている方との関係を継続できる、親しい付き合いができる方との出会いが得られるまちづくりが一つのキーワードとして考えられる。

（4）活動への参加状況

アンケートの結果を踏まえると、現在何かしらの地域活動を「している」方は全体の1/4程度にとどまるものの、「今はしていないがしていたことがある」、「したことがない」という方の中には関心がありつつも参加していない方も多くいることが明らかになった。

今後はそれぞれの状況に応じた支援や取り組みを行うことで、住民参加による地域活動の活性化を図ることが必要であろう。また、現在は時間が無くて地域活動等に参加できていない住民もライフサイクルの中で将来的には地域活動に時間を取れるような生活に変化することも考えられるため、そのような方が参加できるようになった時・参加したいと思った時にスムーズに参加するための仕組みについても検討していくことが重要である。

(5) 生活上の悩みや不安・必要な支援

住民が地域の中でいつまでも住み続けるということは、ただ「住み続けられる」ということだけではなく、「安心して住み続ける」ことが重要である。しかし、生活において全く悩みや不安ごとがない状態を維持することは現実的ではない。

「安心して住み続ける」ためには、悩みや不安ごとが出てきた場合にも、誰かに相談したり助けを求めたりすることで、その悩みや不安を少しずつでも解消することができる、という環境を実現することが重要といえよう。つまり、悩みや不安を感じたとしても、住民が相談できる・助けを求めることができる人間関係を有している、若しくは気軽に相談できるような専門の相談機関・窓口等が町内に設置・周知されている環境の実現ともいえる。

(6) 住民同士の支え合い活動

今後は全国的に人口減少に伴う生産年齢人口の減少を背景として、行政や福祉機関等で地域住民が必要とする支援全てを網羅することに支障が生じてくることが懸念されている。

そこで、行政や福祉機関に加えて地域住民も含めた“支え合いのまちづくり”の重要性が指摘されている。これは、従来行政や福祉機関が行ってきた役割の全てを住民に移行するというものではなく、行政、福祉機関が基本となる役割をしっかりと果たした上で、住民も可能な範囲で支え合い活動を行うことで、行政、福祉機関、住民の三者が協力して“住み続けられるまち”をつくりあげていくことを意味している。

上記の回答結果を踏まえると、住民による支え合いは決して無理をして行うものではないこと、また住民が様々な考え方をもてる地域であることの重要性を確認した上で、“困っている人がいるなら自分ができる範囲で手助けしたい”と考えている方がそれを行動に移しやすくするための仕組みについても検討していくことが必要である。

(7) 組織・団体の認知度

各組織に対する認知度については、それぞれに差がありつつも、住民が「何かあった時に相談してみよう」と思えるような組織・団体として機能するためには十分とはいえない認知度の組織・団体もみられた。

これらから、今後はまず身近に相談できる方や交流できる方が1人でもいるように住民の出会いやつながりが生まれるまちづくり、必要な時にすぐに相談できるような専門的な機関や住民・互助組織の継続した広報・周知が必要といえる。これは、役場や社会福祉協議会が取り組むべき施策（問 19）を確認しても、「地域内で孤立しない・させないための取り組みの強化（53.1%）」への回答が最も高かったことともつながる方針である。

(8) 「いつまでも住み続けられるまち」に向けた課題や方向性

調査結果に基づいて、上記のように「鷹栖町に住み続けることへの意識」、「地域における付き合い」、「活動への参加状況」、「生活上の悩みや不安・必要な支援」、「住民同士の支え合い活動」、「組織・団体の認知度」をそれぞれ整理してきた。この中で明らかになったことを踏まえると、「いつまでも住み続けられるまち」に向けて以下の課題や方向性が見えてきた。

まず、今後も鷹栖町に住み続けたいと考えている住民が“安心して住み続けられるまち”であること、また不安等を背景に住み続けることに否定的な意識を持っている住民も“住み続けたい”と思えるような不安・悩みを解決できるまちであることが、鷹栖町が目指すべき方向性と考えられる。

次に、町内での付き合いや地域活動への参加状況については、近所付き合いや町内会活動への参加は若干減少している部分が見られたが、町内全域で見るときには親しい付き合いをしている方がいる住民が多いこと、町内会活動以外の地域での活動に現に参加している人や今後の参加について希望を持っている人が一定以上の割合で存在することが分かった。これらより、近所付き合いや町内会活動は今後も維持しつつも、町全体での人々のつながりづくりや活動参加に向けた取り組み・施策も検討することが重要であると考える。

また、人々の悩みや不安からは、どのような悩みや不安を持ちつつも相談できる人がいるような人々のつながりづくりと、今まさに直面している問題についても住民にとってアクセスしやすい相談機関・窓口の設置が必要であることが示唆された。これは地域内で孤立しない・させないための取り組みとしても位置づけられるものである。

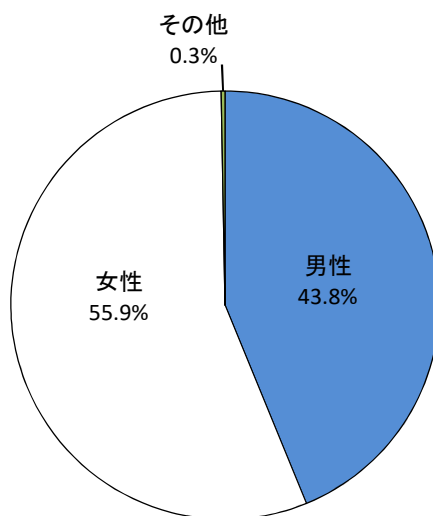
さらに、住民の支え合い活動については、多様な考え方が尊重されつつも、“困った人がいたらできる範囲で手助けしたい”と考える住民が、それを行動に移していけるための仕組みづくりが重要であることが分かった。

今後人口が減少し高齢化が進展していく中でも、これらの方向性に向けて課題への取り組みを検討することで、住民が“安心して住み続けることができるまちづくり”を進めていくことが重要である。

3. 調査結果（全世帯版）

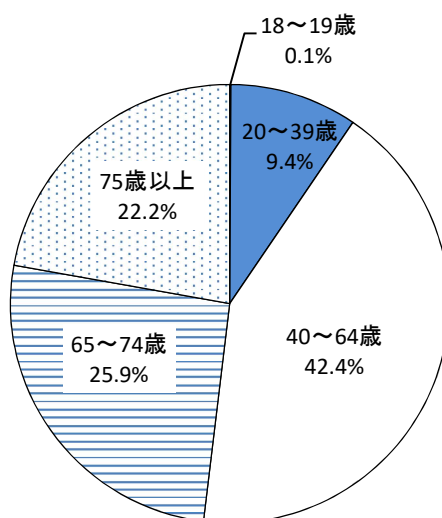
問1 あなたの性別を教えてください。（S A）

性別については、「男性」が43.8%、「女性」が55.9%、「その他」が0.3%となっている。

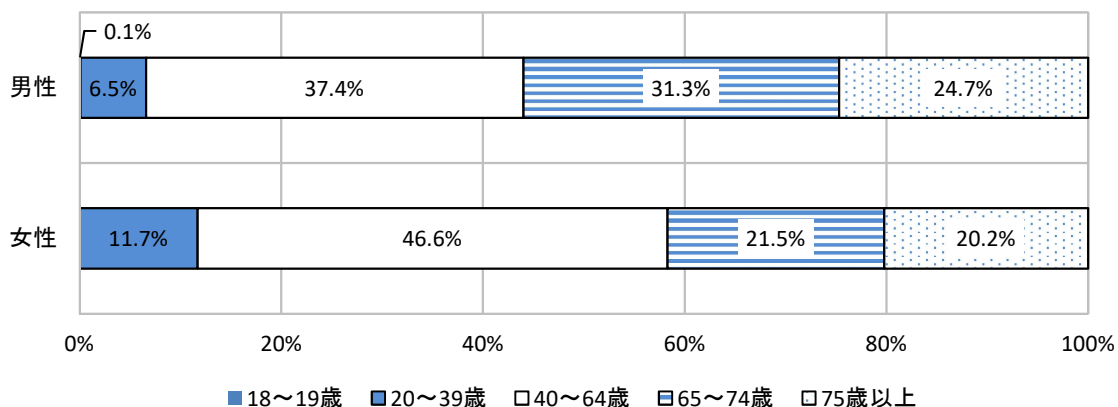


問2 あなたの年齢を教えてください。（S A）

年齢については、「40～64歳」が42.4%と最も高く、次いで「65～74歳」が25.9%、「75歳以上」が22.2%となっている。

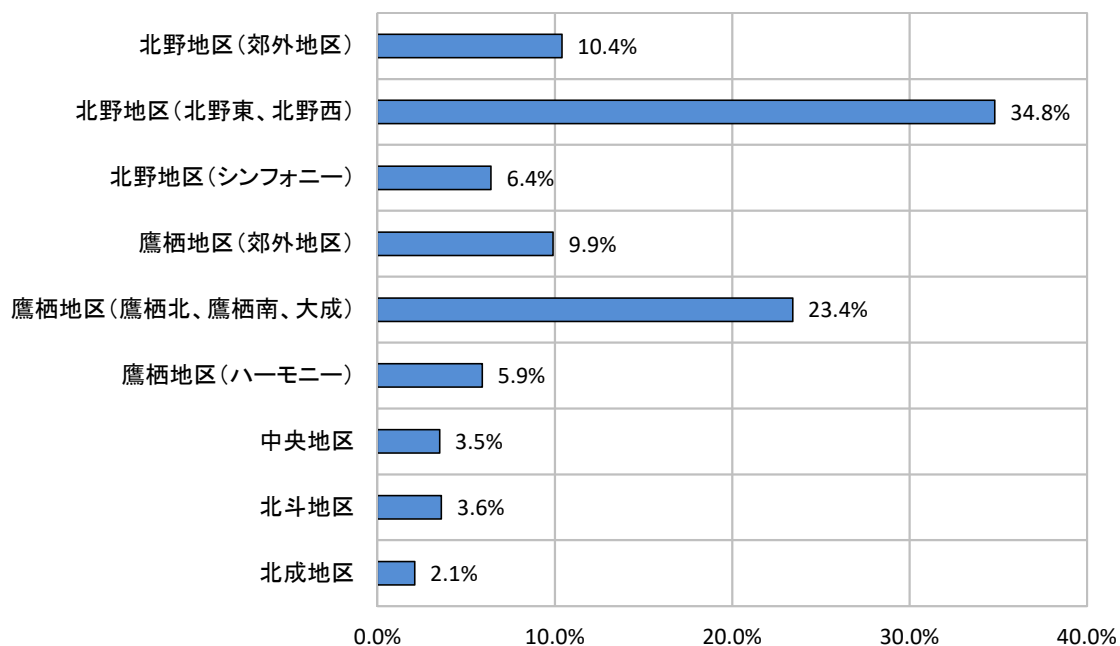


性別に年齢をみると、「女性」では「20～39歳」「40～64歳」の割合が、「男性」の割合より高くなっており、「男性」では、「65～74歳」「75歳以上」の割合が「女性」の割合より高くなっている。



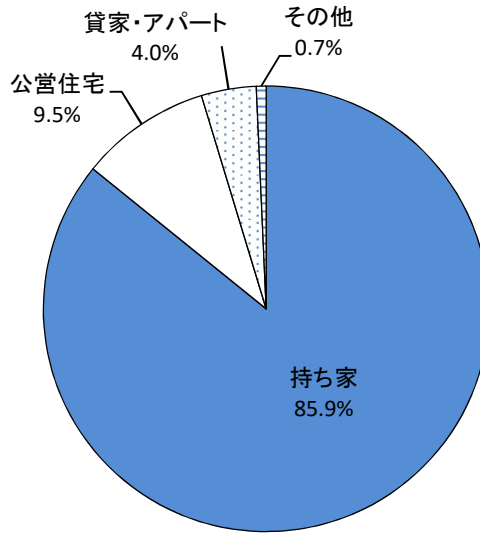
問4 あなたのお住まいを教えてください。(SA)

居住地区については、「北野地区（北野東、北野西）」が34.8%と最も高く、次いで「鷹栖地区（鷹栖北、鷹栖南、大成）」が23.4%となっている。



問5 お住まいの形態について教えてください。(S A)

住まいの形態については、「持ち家」が85.9%と最も高く、次いで「公営住宅」が9.5%、「賃貸・アパート」が4.0%となっている。

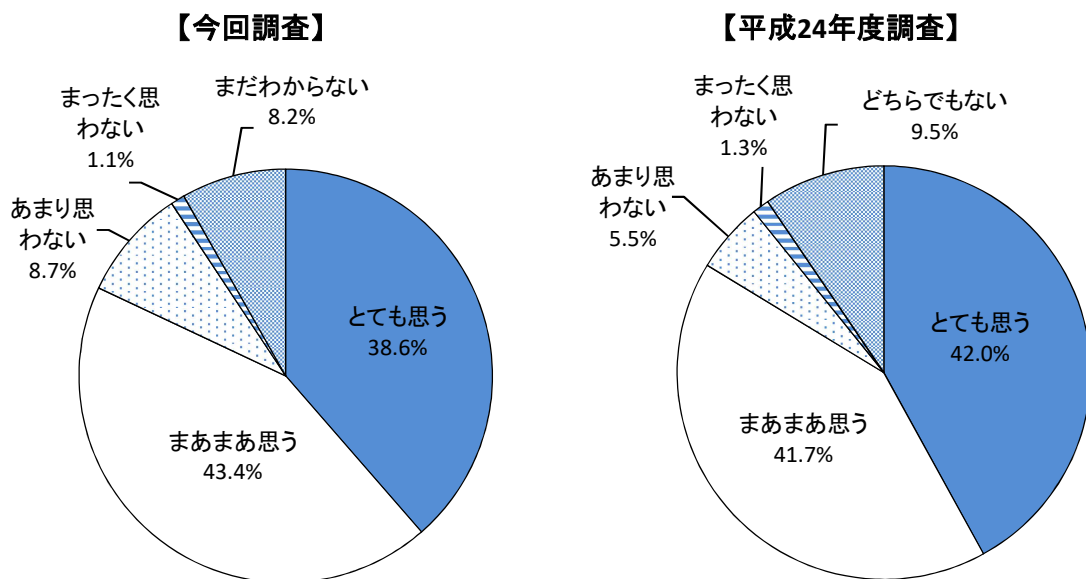


問6 あなたは鷹栖町に住み続けたいと思いますか。(S A)

鷹栖町に住み続けることへの意識については、「とても思う」(38.6%)と「まあまあ思う」(43.4%)を合わせると8割を超える人が住み続けたいという意識を持っていた。

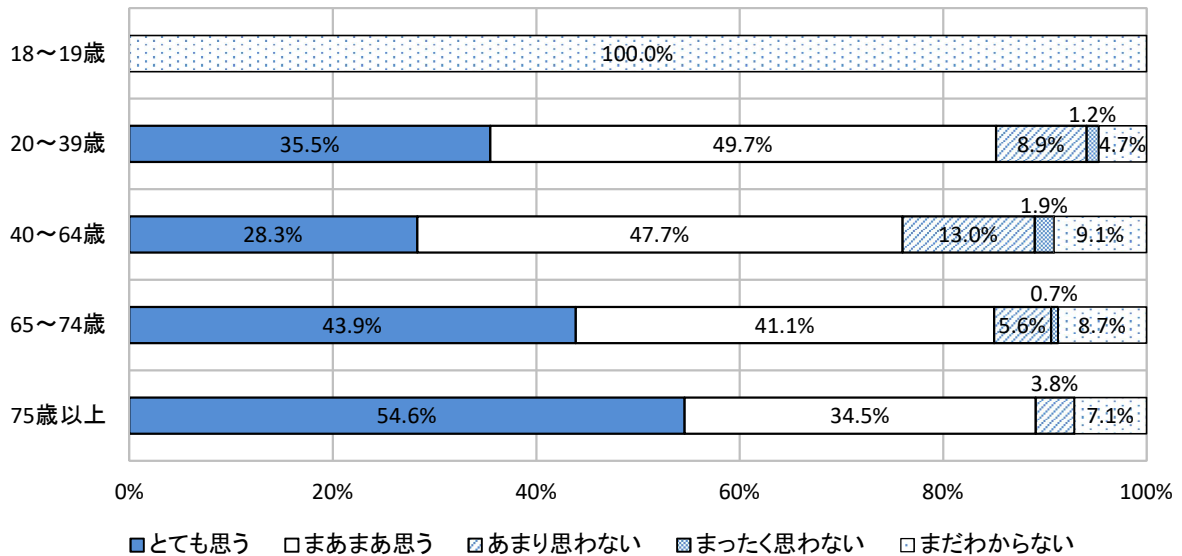
しかし、「あまり思わない」(8.7%)と「まったく思わない」(1.1%)という人や「まだわからない」(8.2%)という人もそれぞれ1割近くいることが示された。平成24年度に実施した前回調査の結果は、「とても思う」が42.0%、「まあまあ思う」が41.7%、「あまり思わない」が5.5%、「全く思わない」が1.3%、そして「どちらでもない」が9.5%となっていた。

「とても思う」が若干(3.4%)減少し、「あまり思わない」がその分程度増加していたが、大枠としてはほぼ同じ結果を示していた。



年齢別に住み続けることへの意識をみると、「40～65歳」の「とても思う」は28.3%、「まあまあ思う」が47.7%と他の年齢と比べて割合が低くなっている。

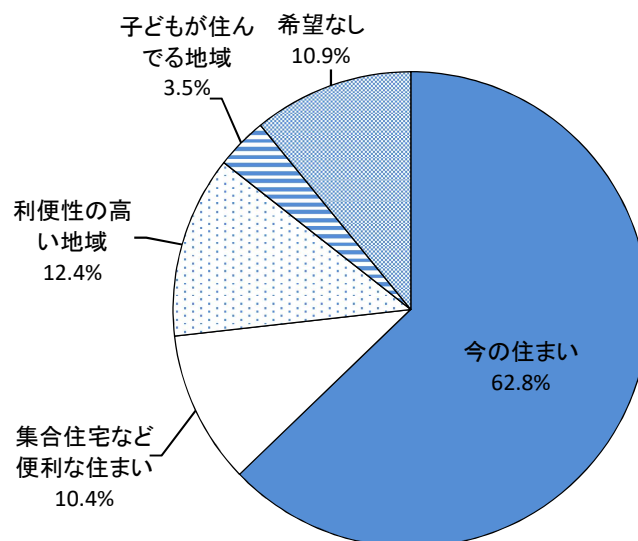
また、「とても思う」は年齢が上がるにつれ、「20～39歳」は35.5%、「65～74歳」は43.9%、「75歳以上」は54.6%と上昇している。



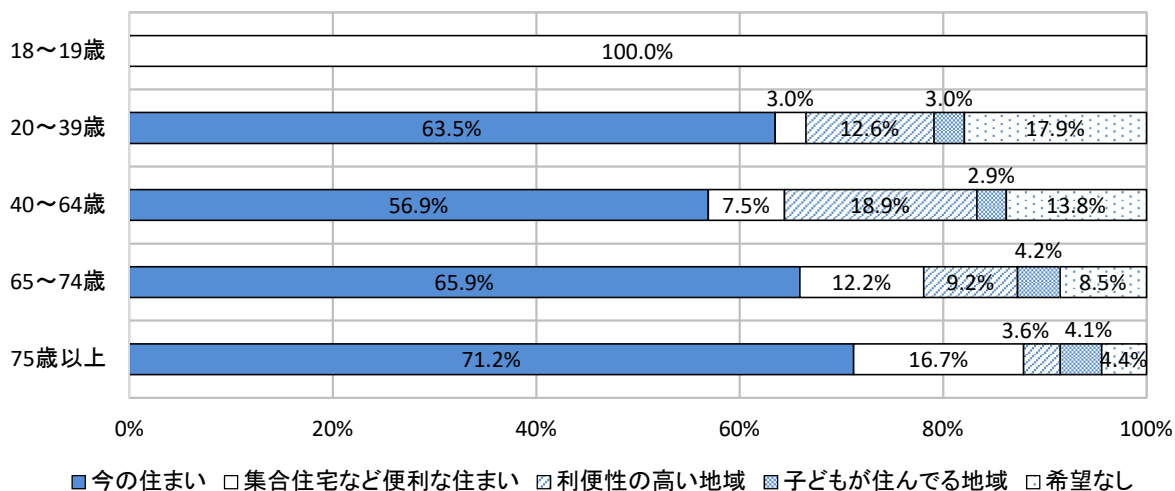
問7 今後の住まいについてどのような意向をお持ちですか。(S A)

他方で、今後の住まいへの意向では、「今の住まいに住み続けたい」(62.8%)と「町内で便利な住まいで暮らしたい」(10.4%)という“町内の住まい”への意向を合わせると7割以上の回答となっていたが、これは鷹栖町に住み続けたいという意識を示した8割の回答よりも低い結果である。

「札幌等利便性の高い地域で暮らしたい」(12.4%)や「子どもが住んでいる地域で暮らしたい」(3.5%)といった“町外での住まい”を希望する回答や「特に希望はない」(10.9%)という回答もそれぞれ1割以上となった。

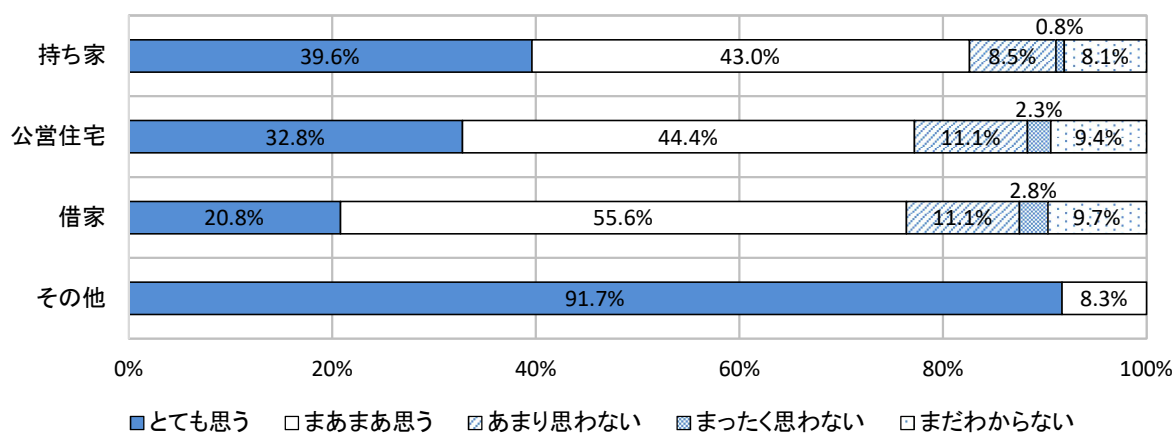


年齢別に今後の住まいへの意識をみると、「20～39歳」と「40～64歳」の「札幌等利便性の高い地域で暮らしたい」がそれぞれ12.6%、18.9%と他の年齢と比べて割合が高くなっている。



そこで、「住み続けることへの意識」と「住まい形態」・「今後の住まいへの意向」とのクロス集計を行った。その結果、「住まい形態」は「持ち家」「公営住宅」「借家（アパート含む）」に関わらず、住み続けることに対して「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」「まだわからない」と回答した方がそれぞれ一定の割合でいることが示された。

【住まい形態別の住み続けることへの意識】

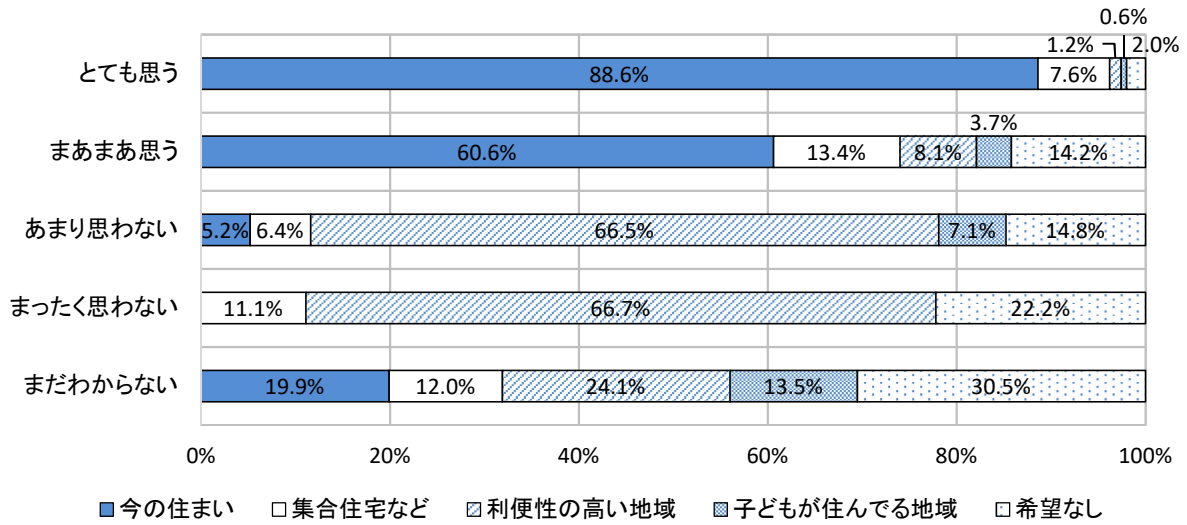


一方で、「今後の住まいへの意向」に関しては、「住み続けることへの意識」で「とても思う」と回答した場合には、ほとんどが「今の住まいに住み続けたい」（88.6%）「町内で便利な住まいで暮らしたい」（7.6%）という“町内の住まい”への意向を有していたが、「住み続けることへの意識」が「まあまあ思う」の場合には「札幌等利便性の高い地域で暮らしたい」（8.1%）「子どもが住んでいる地域で暮らしたい」（3.7%）といった“町外での住まい”を希望する回答が1割を超える結果となり、また「特に希望はない」（14.2%）という回答も一定数見られた。

さらに、「住み続けることへの意識」が「あまり思わない」「まったく思わない」の場合にはともに“町内の住まい”への希望は1割程度となり、「札幌等利便性の高い地域で暮らしたい」

「子どもが住んでいる地域で暮らしたい」といった“町外での住まい”への希望や「特に希望はない」が9割近い結果となった。

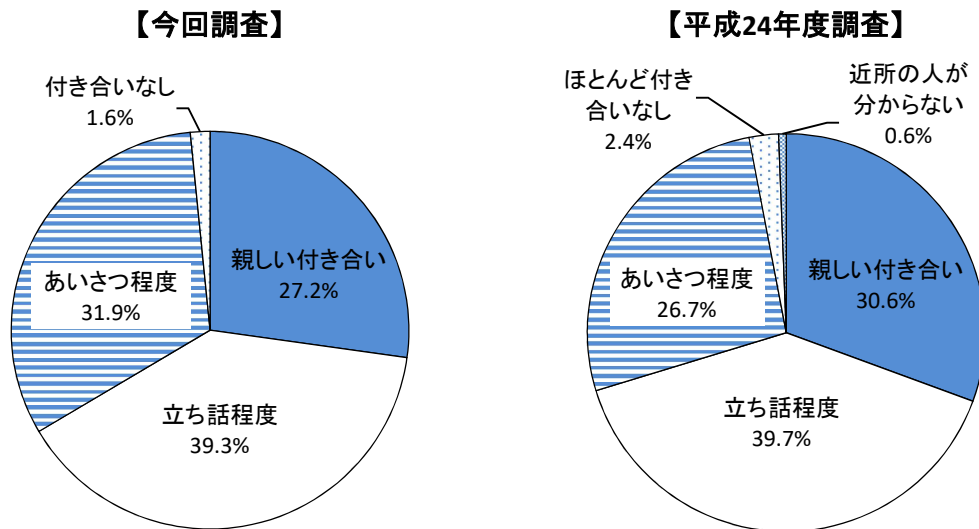
【住み続けることへの意識別の今後の住まいの意向】



問8 あなたはとなり近所の方と、どの程度のお付き合いをしていますか。(S A)

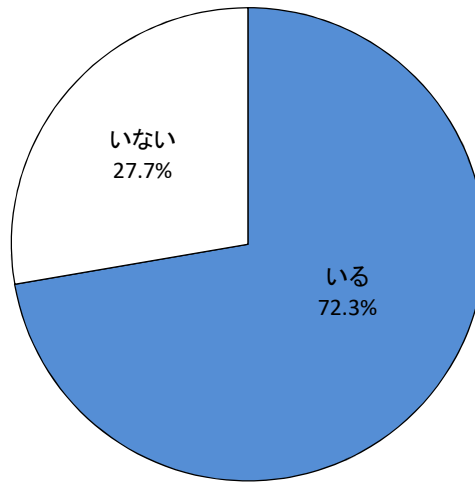
となり近所の方との付き合いに関しては、「親しく付き合っている」(27.2%)、「立ち話をする程度」(39.3%)、「挨拶をする程度」(31.9%)、「付き合いはない」(1.6%)となっている。平成24年度調査結果の「親しく付き合っている」(30.6%)、「立ち話をする程度」(39.7%)、「挨拶をする程度」(26.7%)、「付き合いはない」(2.4%)と比較すると、「親しく付き合っている」が若干減少し、その分「挨拶をする程度」が増えていた。

「付き合いはない」の回答率がわずかながら減少していたことは地域にとって望ましい変化といえるが、このような世帯の方は一般的にアンケートの回答率が低下することを考えると、前回より10%弱回収率が低下した影響による変化の可能性もあるだろう。これらの結果より、近所づきあいは低下傾向にある可能性が考えられる。



問9 あなたは、となり近所に限らず町内で親しくお付き合いをしている方がいますか。(SA)

町内で親しく付き合っている方の有無を確認すると、「いる」(72.3%)「いない」(27.7%)となっており、7割以上の方に町内で親しく付き合っている友人・知人がいることが分かった。

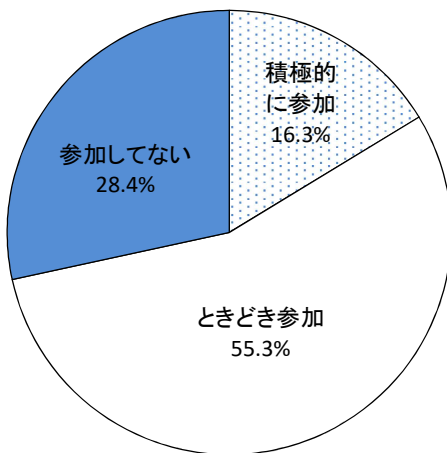


問10 あなたは町内会活動、町内の行事にどの程度参加していますか。(SA)

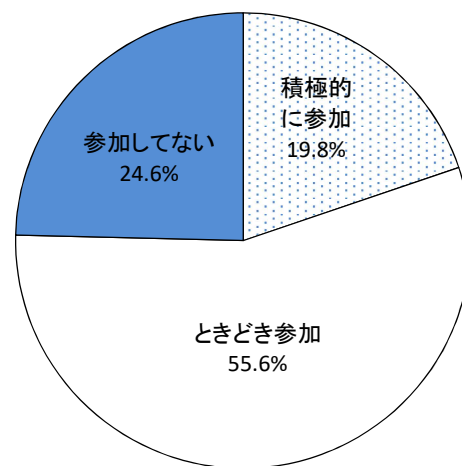
町内会活動への参加状況については、「積極的に参加している」(16.3%)「ときどき参加している」(55.3%)と参加している方の割合が7割を超えていたものの、3割近い回答者が「参加していない」(28.4%)状況であることが示された。

ここでも、前回調査より「積極的に参加している」(前回：19.8%)という回答が3.5%減少し、「参加していない」(前回：24.6%)が3.8%増加する結果となった。

【今回調査】



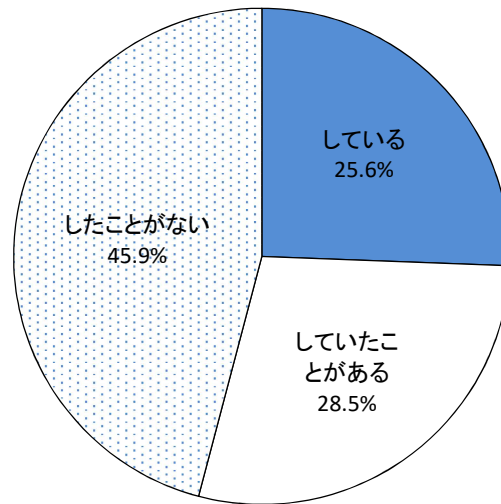
【平成24年度調査】



問 11 あなたは鷹栖町内で地域活動やボランティア活動、サポーター活動をしていますか。(S A)

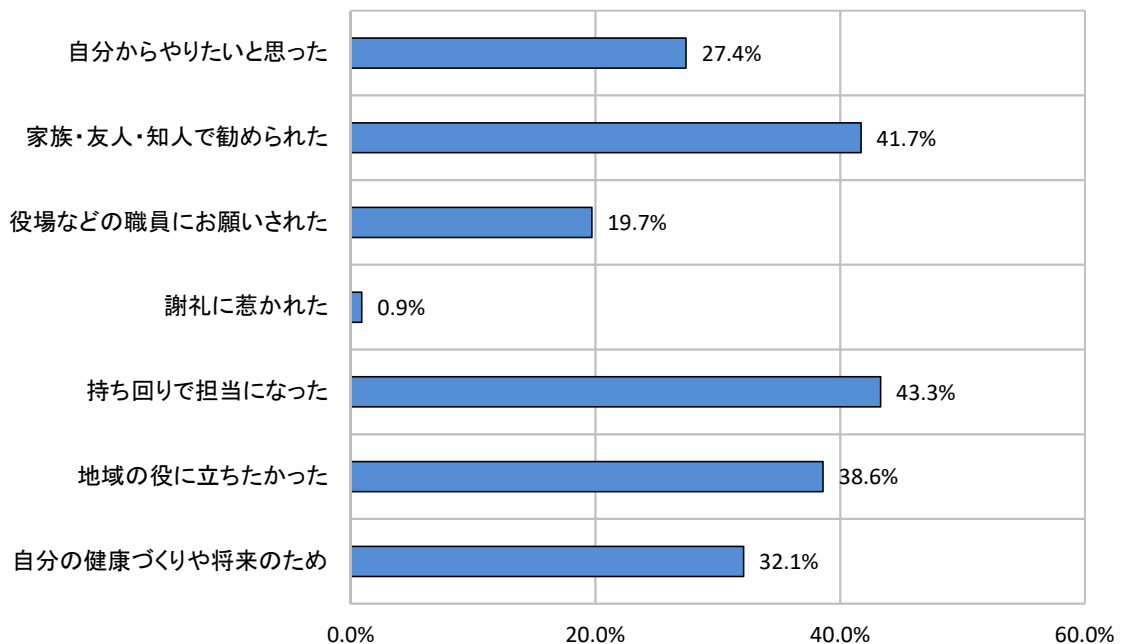
鷹栖町内での地域活動等への参加状況については、「している」(25.6%)「今はしていないがしたことがある」(28.5%)、そして「したことがない」(45.9%)という結果であった。

今後の住民の地域活動への参加を促すための方策には、現在している・していないということ以上に、それぞれ「している」、「今はしていない」、「したことがない」の動機や理由が重要である。



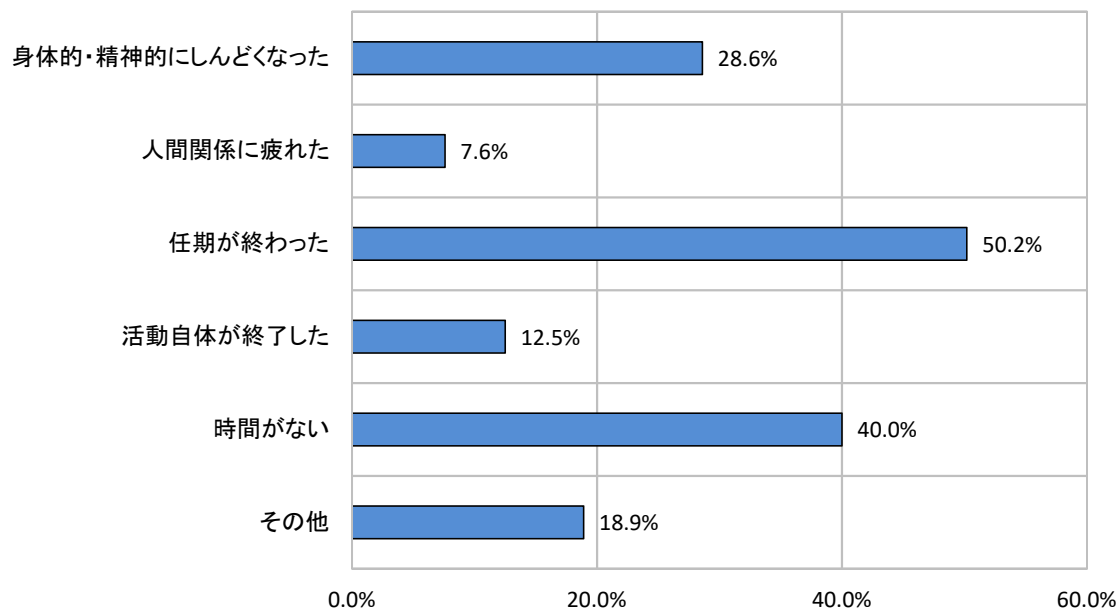
問 12 活動をしたきっかけ、動機は何ですか。(M A)

活動していると回答した人のきっかけ、動機については、「持ち回りで担当になった」(43.3%)という回答が多かったものの、「家族・友人等の勧め・誘い」(41.7%)や「地域の役に立ちたかった」(38.6%)の回答が高くなっており、地域内での付き合いや地域への貢献意欲を持って地域活動に参加している方も多くいることが分かる。



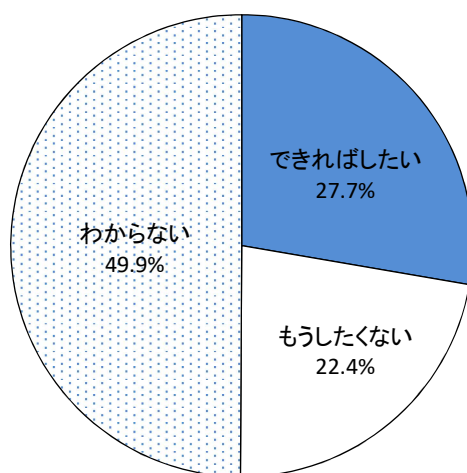
問 13 なぜ今は活動していないのですか。(MA)

活動を今はしていないがしたことがあると回答した人の今はしていない理由については、「任期の終了」(50.2%)という理由が多く、「している」方の動機・理由からの連続性がみられるが、「仕事・家庭の事情で時間がない」(40.0%)や「心身の疲れ」(28.6%)という回答も多くなっていた。



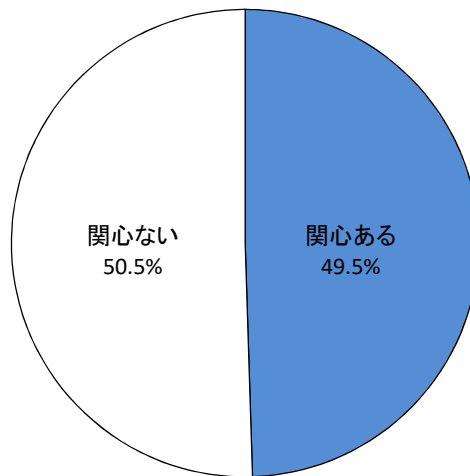
問 14 今後活動することに対してどのような意向をお持ちですか。(MA)

活動を今はしていないがしたことがあると回答した人の今後の活動参加への意向については、「もうしたくない」(22.4%)が最も少なく、「できればしたい」(27.7%)や「わからない」(49.9%)という回答が多く見られた。



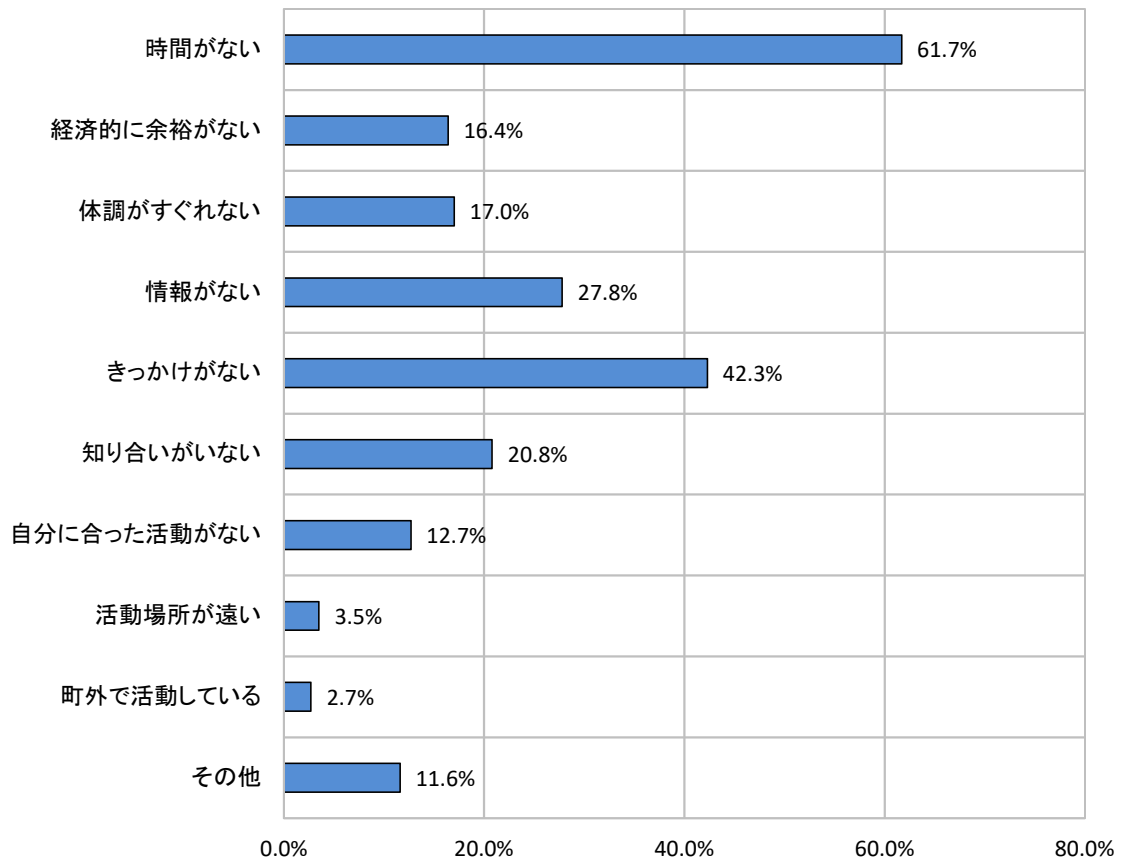
問 15 地域での活動への関心の有無について教えてください。(S A)

活動したことがないと回答した人の地域活動への関心については、「関心はある」(49.5%)と「関心がない」(50.5%)がほぼ半数となっている。



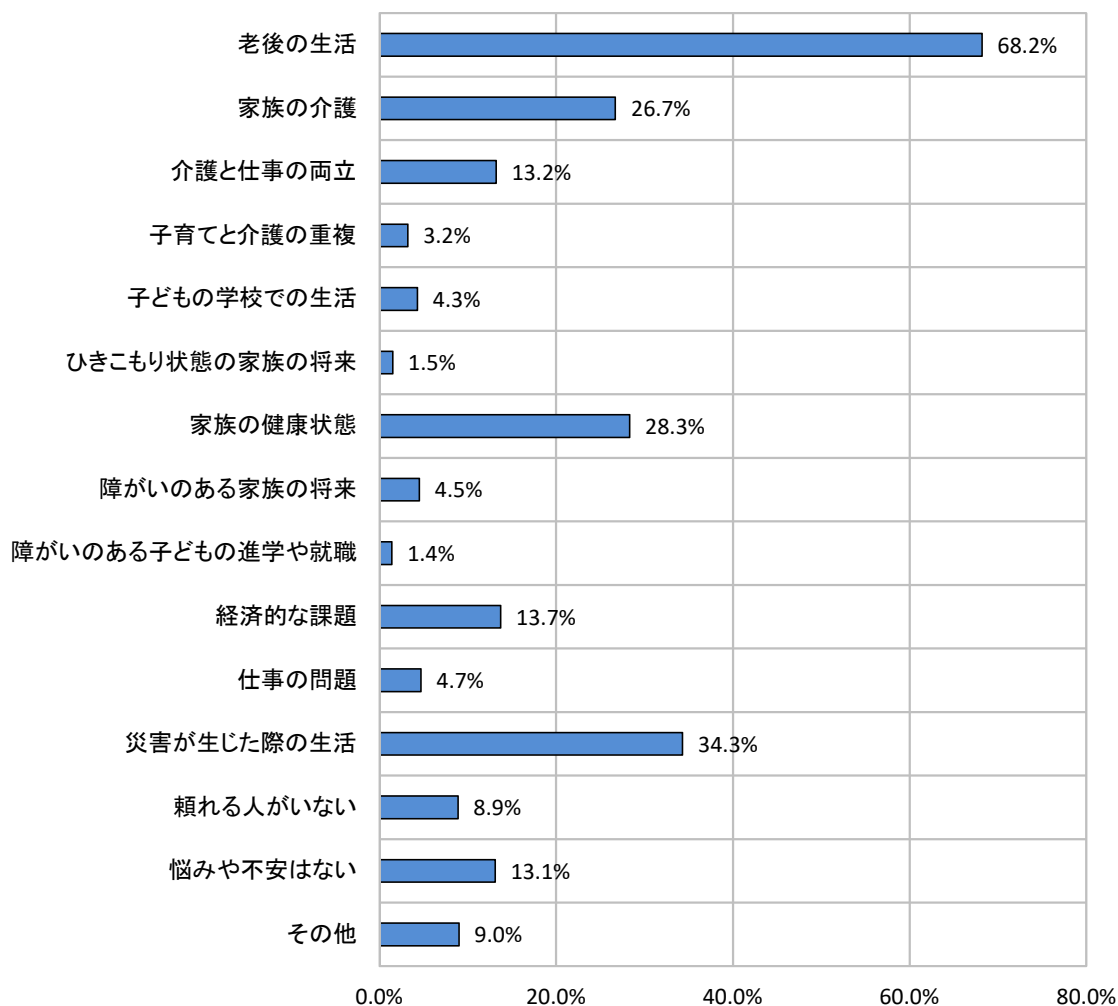
問 16 関心はあるが活動していない理由は何ですか。(M A)

地域活動への関心はあると回答した人の活動していない理由については、「時間がない」(61.7%)が最も多くなっていたが、「始めるきっかけがない」(42.3%)や「どのような活動があるのか情報がない」(27.8%)など、支援や働きかけ次第で活動参加を促すことができる理由が多くみられた。



問 17 現在、悩みや不安に感じていることはありますか。(MA)

住民が現在感じている悩みや不安については、回答が多かった悩みや不安と、比較的回答が少なかった悩みや不安があることが分かる。



中でも、「老後の生活」(68.2%)、「地震や台風などの災害が生じた際の生活」(34.3%)、「家族の健康状態」(28.3%)、「家族の介護」(26.7%)が、回答が多かった悩みや不安である。これらは、将来誰にでも起こり得ることであり、またどのような状態で発生するのか予測することができない悩みや不安であることが共通している。

これに対して、「障がいがある子どもの進学や就職」(1.4%)、「ひきこもり状態にある家族の将来」(1.5%)、「ダブルケア(子育てと介護の二重役割)」(3.2%)、「子どもの学校での生活(いじめや不登校など)」(4.3%)、「障がいがある家族の将来(親亡き後など)」(4.5%)、「未就労や不安定雇用など仕事の問題」(4.7%)は回答者が5%以下と少なくなっていた。

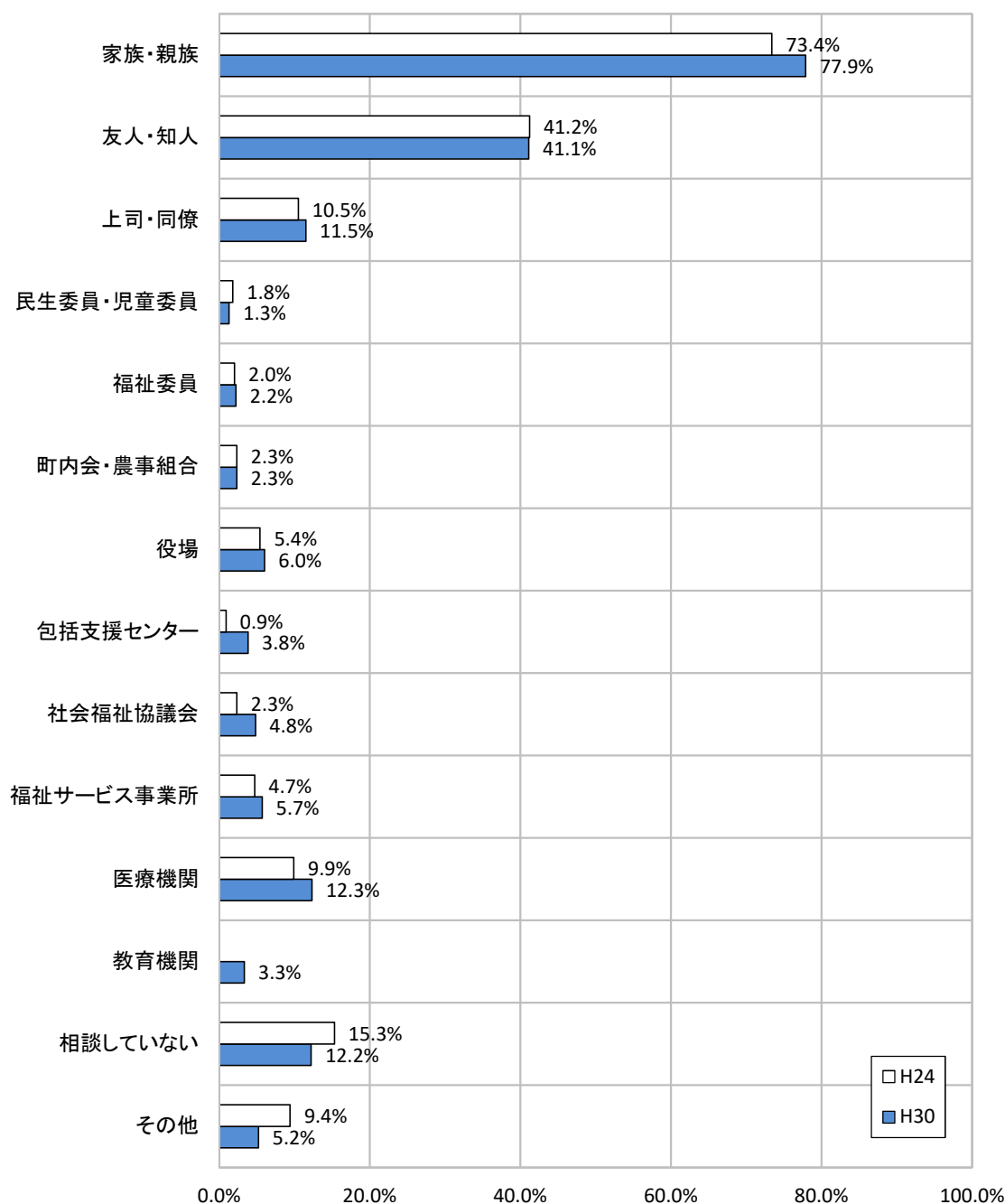
これらは、回答が多くなっていた悩みや不安とは異なり、将来誰にでも起こり得るというよりは、まさに今直面している、もしくは近い将来直面することになる可能性が高い場合に「あり」と回答することになる悩みや不安といえる。その点では、今まさにこのような不安や悩みを抱えながらも、それを不安や悩みを低減・解消することができずに困っている人々の存在を示唆する結果とも考えられる。

回答が多かった「老後の生活」や「災害が生じた際の生活」といった悩みや不安については町全体でそれを支えられる仕組みをつくりあげていき、住民に周知していくことが重要である

と同時に、回答者は少なかったとしても「障がいのある子どもの進学や就職」、「ひきこもり状態にある家族の将来」、「ダブルケア」等の今まさに悩みや不安に直面している可能性がある住民に対しては、できるだけ速やかにこれらの人々を支援する体制を確立し、また、このような悩みや不安を感じている人を発見・把握していくことが必要である。

問 18 あなたは悩みや不安について、どこに・誰に相談していますか。(MA)

悩みや不安の相談先については、「家族・親族」(77.9%)、「近所の人・友人・知人」(41.1%)が多くなっており、多くの住民は家族や近隣・友人などに相談できる方がいることが分かる。



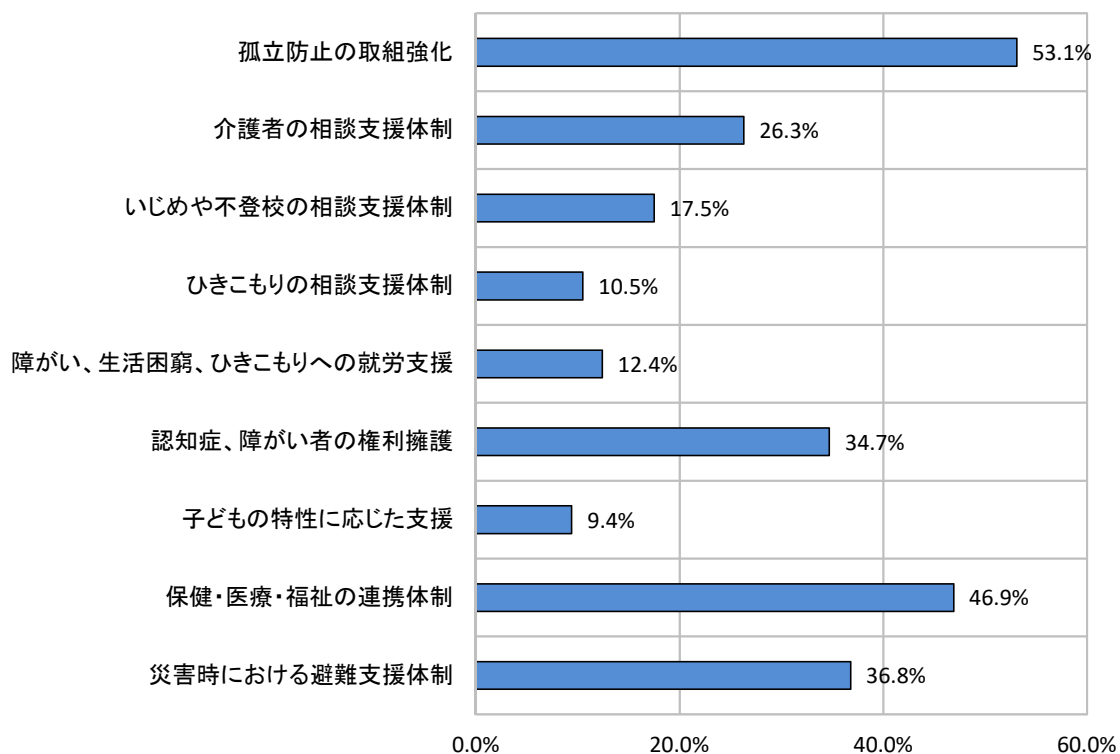
しかし、割合としては少なかったとしても、家族や近隣・友人に相談できる方がいない住民は、悩みや不安を抱えながらも誰にも相談できずに孤立してしまう可能性が高くなることに注意が必要である。

悩みや不安（問 17）においても、「頼れる人・交流のある人がいない」（8.9%）と回答した方が1割近くいたことは大きな課題といえる。一方、「役場の相談窓口や職員」（6.0%）、「地域包括支援センターの窓口や職員」（3.8%）、「社会福祉協議会の窓口や職員」（4.8%）などの公的な相談機関に相談している方も少数ながら確認することができた。また、「民生委員・児童委員」（1.3%）、「福祉委員」（2.2%）、「町内会・農事組合などの役員」（2.3%）等の住民組織・互助組織に相談するという回答もわずかながら見られた。

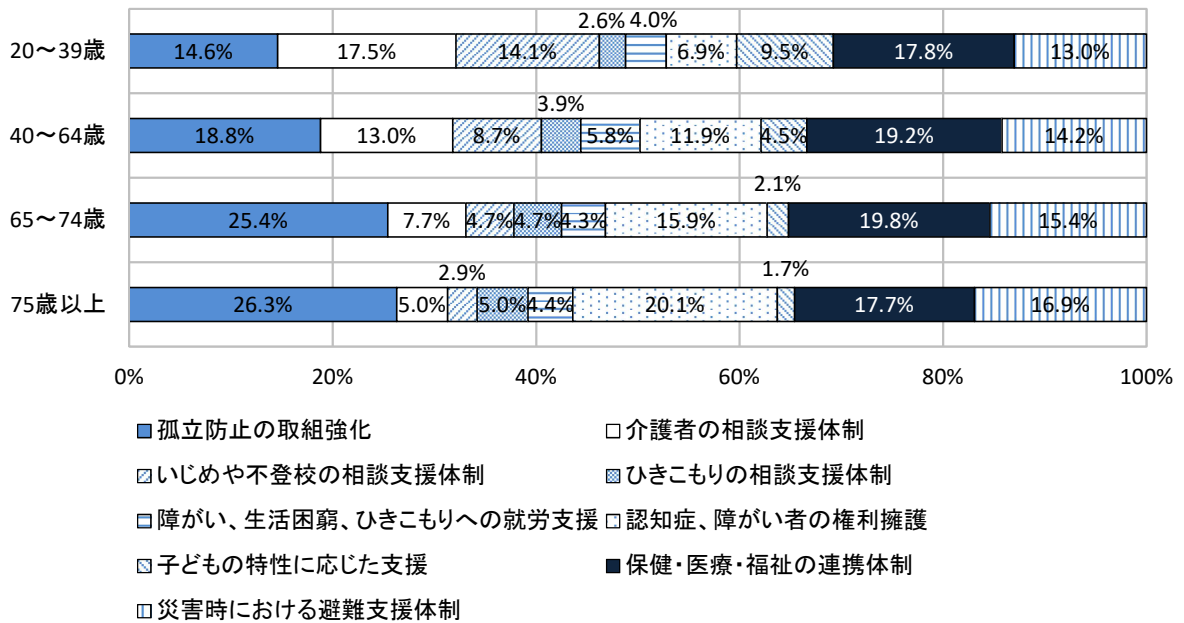
これらの機関・団体等に現に相談する必要がある状況にはない住民が多いとすればそれは問題ではないが、相談する必要があるにもかかわらず相談できることを知らない、相談へのハードルが高くて相談できていないという理由から相談できていない方がいるとしたら早急な改善が必要である。

問 19 役場や社会福祉協議会が取り組むべき施策として重要と考えるものを教えてください。（MA）

取り組むべき重要な施策については、「孤立防止の取組強化」（53.1%）が最も高く、次いで「保健・医療・福祉の連携体制」（46.9%）、「災害時における避難支援体制」（36.8%）、「認知症、障がい者の権利擁護」（34.7%）、「介護者の相談支援体制」（26.3%）となっている。

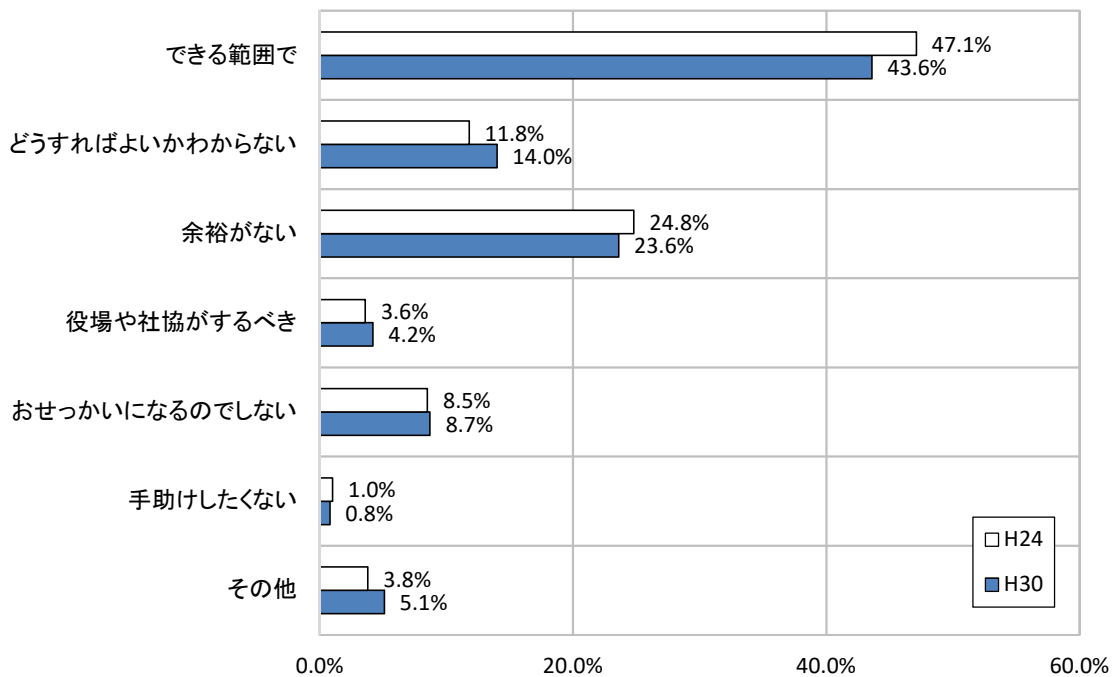


年齢別に取り組む重要な施策の意識をみると、年齢によって「孤立防止の取組強化」と「認知症、障がい者の権利擁護」の割合が上昇しており、「介護者の支援体制」、「いじめや不登校の相談支援体制」、「子どもの特性に応じた支援」の割合は減少している。また、「保健・医療・福祉の連携体制」と「災害時における避難支援体制」については、全年齢において一定の割合があることが示された。

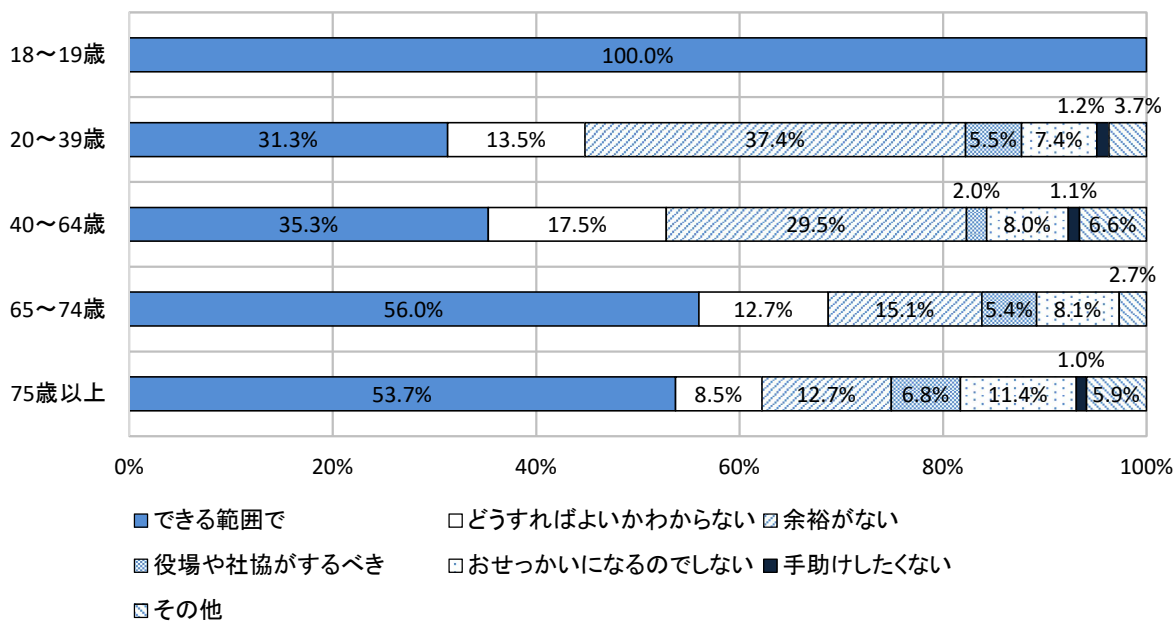


問 20 近所で日常生活上の手助けを必要としている方への手助けについて、あなたの考えに最も近いものはどれですか。(S A)

近所での支え合い活動への考えについては、「できる範囲で手助けしたい」(43.6%)という回答が最も多く見られ、「したいがどうすればよいかわからない」(14.0%)という回答も合わせると6割近い回答者が近所における住民の支え合い活動に前向きな意向を持っていることが分かる。もちろん、「手助けしたいが余裕がない」(23.6%)という状況の方や、「手助けは役場や社会福祉協議会がするもの」(4.2%)、「おせっかいになってしまうので手助けはしない」(8.7%)という考え方をもつ住民も少なからず存在している。



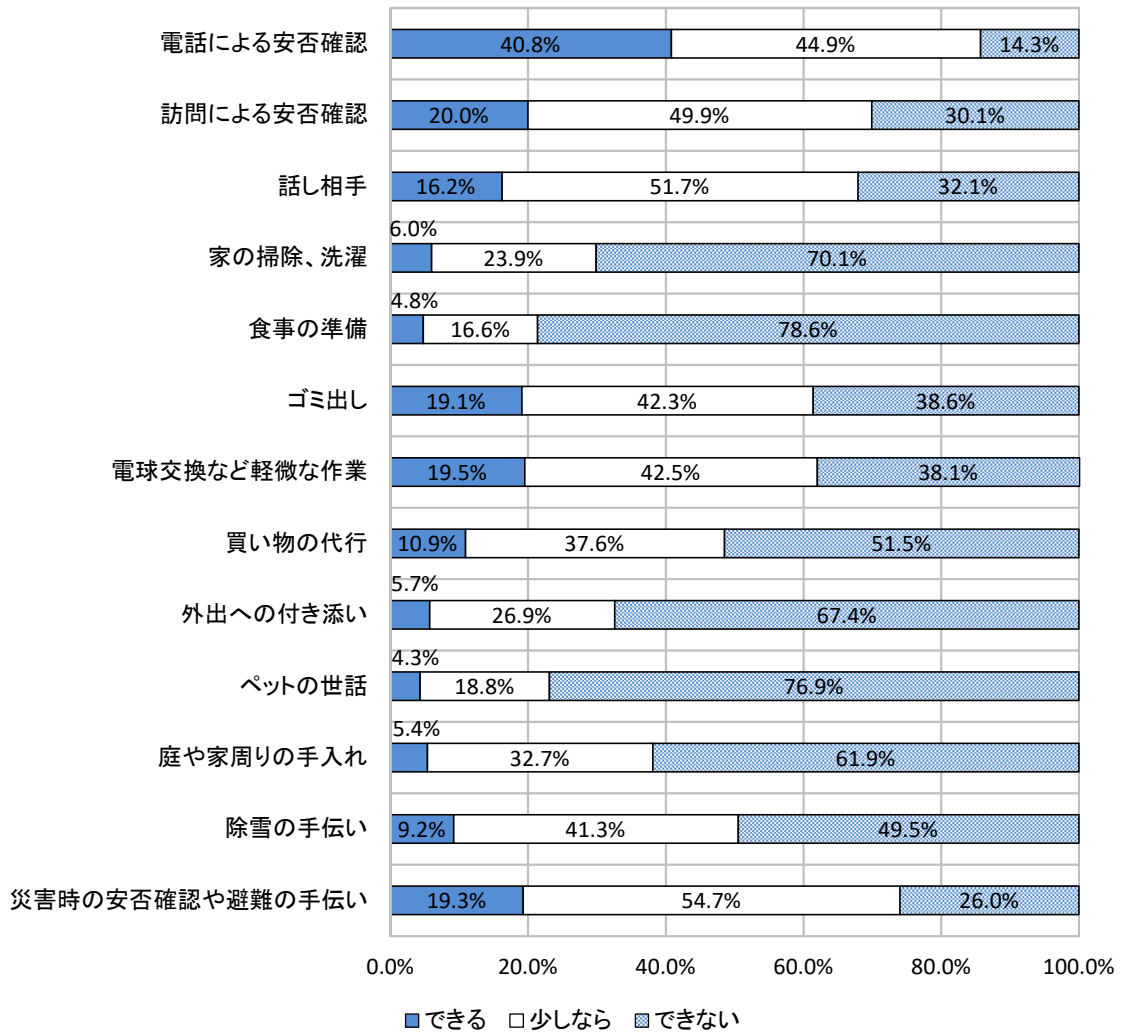
年齢別に支え合い活動の意識をみると、「20～39歳」と「40～64歳」は現役世代ということもあり、「余裕がない」(37.4%、29.5%)が一定の割合がいる。また、「65～74歳」と「75歳以上」では「できる範囲」(56.0%、53.7%)という5割超の回答となっている。



問 21 鷹栖町内で手助けを必要としている人から頼まれた場合、どのようなことができますか。(S A)

手助けを必要としている人への支援については、「電話による安否確認」の「できる」(40.8%)と「少しなら」(44.9%)を合わせると8割を超える人が、また、「訪問による安否確認」、「話し相手」、「ゴミ出し」、「電球交換など軽微な作業」の「できる」と「少しなら」を合わせると7割近くの人が手助けについて肯定的な意識を持っていた。

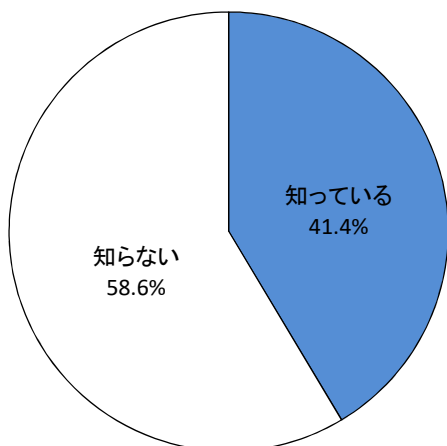
一方で「家の掃除、洗濯」、「食事の準備」、「ペットの世話」などその人の生活に密接する行動においては、「できない」が7割以上の回答となっており、ハードルが高いと思われる。



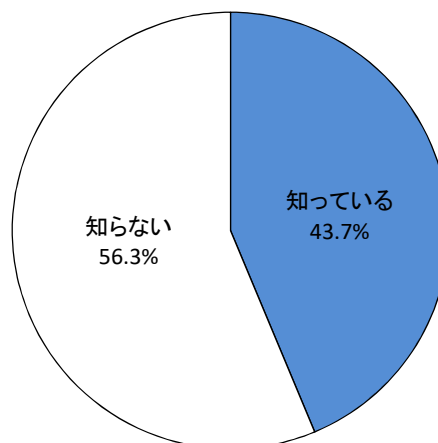
問 22 あなたの住んでいる地区の民生委員・児童委員を知っていますか。(S A)

民生委員・児童委員の認知度については、「知っている」が41.4%、「知らない」が58.6%となっている。

【今回調査】

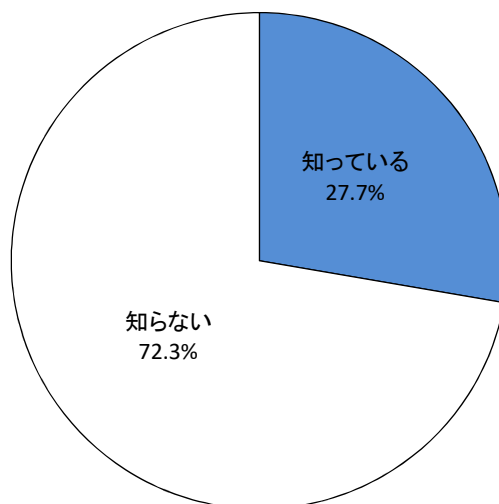


【平成24年度調査】



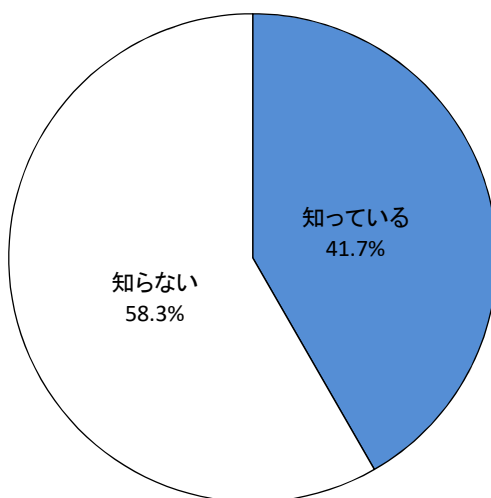
問 23 あなたの住んでいる地区の福祉委員を知っていますか。(S A)

福祉委員の認知度については、「知っている」が27.7%、「知らない」が72.3%となっている。



問 24 鷹栖町の生活福祉相談センターを知っていますか。(S A)

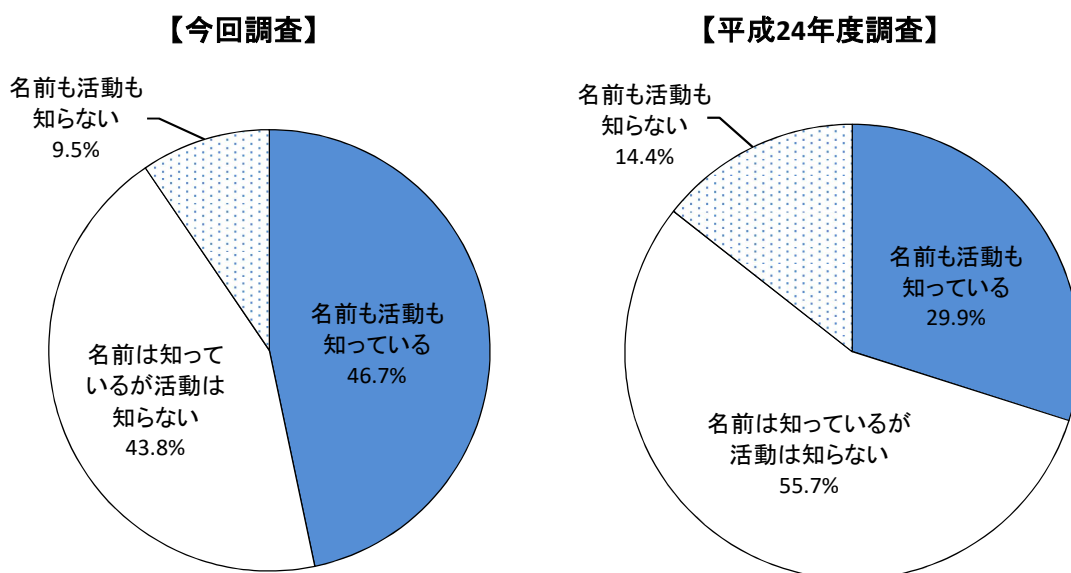
生活福祉相談センターの認知度については、「知っている」が41.7%、「知らない」が58.3%となっている。



問 25 鷹栖町社会福祉協議会を知っていますか。(S A)

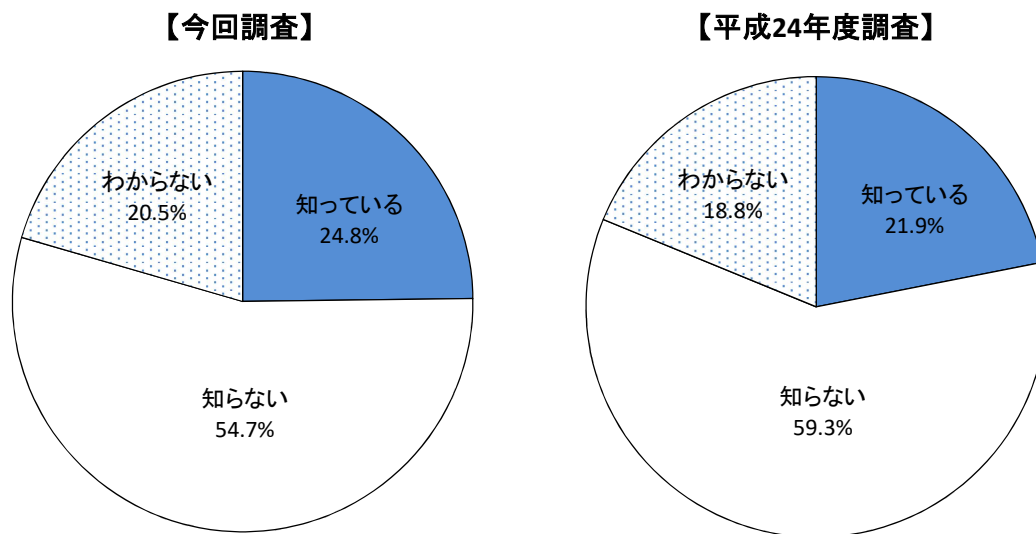
社会福祉協議会の認知度については、「名前も活動も知っている」が46.7%で、「名前は知っているが活動は知らない」が43.8%、「名前も活動も知らない」が9.5%となっている。

前回調査より「名前も活動も知っている」(前回:29.9%)という回答が16.8%増加し、「名前も活動も知らない」(前回14.4%)という回答が4.9%減少しており、全体的に認知度が上昇してきていると言える。



問 26 あなたは鷹栖町社会福祉協議会の会員であることを知っていますか。(S A)

社会福祉協議会の会員であることの認知度については、「知っている」が24.8%、「知らない」が54.7%、「わからない」が20.5%となっている。



問 27 鷹栖町の福祉行政や鷹栖町社会福祉協議会への意見や要望 (自由記載)

| 分類 | 主な意見 |
|-------------|---|
| 医療・健康に関すること | <ul style="list-style-type: none"> ・鷹栖地区にも北野のコレカラのような機械を使って運動出来る場所がほしい。(女性：40～64歳) ・高齢者の医療費をもっと安くしてほしい。(男性：75歳以上) ・妊婦検診や乳児の予防接種への助成が足りない。(女性：20～39歳) |
| 買い物に関すること | <ul style="list-style-type: none"> ・D a・マルシェへの送迎はしていると聞いていますが、交通手段のない人にイオンのような大きな商業施設への買い物ツアーみたいなのを月1回でもしてほしい。(女性：40～64歳) ・鷹栖町に住み続けたいとは思ってはいますが、高齢化が進み車の免許返納と言う時期になった時、近くに大きな店もなく、買い物難民のような事にならないかと不安になります。(男性：75歳以上) |
| 交通に関すること | <ul style="list-style-type: none"> ・歩くのが不自由なのでどこにも行く事が出来ないのが、段々気持ちが暗くなり、先が非常に不安です。(女性：75歳以上) ・鷹栖町内、北野地区に色々な施設があるのは知っているが、そこまで行く術が無い。(女性：40～64歳) ・鷹栖町にずっと住んでいますが、大変これから不便に感じると思います。車が乗れなくなると、交通の便が悪くて病院や買物が出来なくなります。(男性：65～74歳) |

| 分類 | 主な意見 |
|--------------|--|
| 高齢者に関すること | <ul style="list-style-type: none"> ・介護の施設や情報をもっと簡単に分かるようになればいいかなと思います。 (男性：20～39歳) ・高齢化による介護認定者の給付費の増加に伴い、更なる介護保険料の値上りが危惧される。介護サービス等にかかる費用の見直しも必要と思われる。 (男性：75歳以上) ・社会福祉協議会も絡めた地域生活支援サービスの拡充を望みます。 (男性：40～64歳) |
| 子育てに関すること | <ul style="list-style-type: none"> ・鷹栖にも高等学校があるが、中学校を卒業する生徒は旭川市内や近郊の高等学校バスで通学しているのが原状。バス通学にかかる費用を申請により町が負担する。(男性：40～64歳) ・鷹栖町に公式の塾を呼んで欲しい。共働きが多くなっています。子どもが習い事、勉強できる環境をもっと増やしていただけると嬉しいです。 (女性：20～39歳) ・子育て世帯も多い鷹栖町なので、町で気軽に相談できる子育てセンターの職員などは今も充実していると思うので、発達心の相談などカウンセラーさんが常にいてもらえるような体制だと安心できるかと思います。色々もっと密に相談したいです。(女性：20～39歳) ・1歳未満の乳幼児の保育園受入先、時期の見直しを行い、母親への就労復帰の後押しを進めてもらいたい。(男性：40～64歳) ・室内で子どもが遊べる施設がほしい。(女性：20～39歳) |
| 支え合い活動に関すること | <ul style="list-style-type: none"> ・共働きなので町内行事や高齢者を見回るのは難しい。町内で強制的に見回せるのではなく、鷹栖町で対応してもらいたい。(女性：20～39歳) ・高い所の電球の取替えなど、業者を呼ぶ程でもない事など身の回りで起きた小さな事が出来ない事が有ります。そんな時、手助けしてくれるところが有ると良いです。その時は対価を決めることも大事。ボランティアだと受ける方は心が痛みます。(女性：65～74歳) ・引きこもり状態の方への支援ですが、困りごとがあっても声を上げる事が出来ない方へのアウトリーチ・訪問支援、それと同時に支援が必要な人も支援されればなしではなく、支援する側になれる場を提供。 (男性：40～64歳) ・地方は人材不足と言われるが、適切な支援で地域を担う力を持っている人を見過ごしているのではないか。(男性：40～64歳) |
| 支え合いに関すること | <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者の引きこもりは、無理に誘わないで遠くから見守る。本人はそれが一番幸せなことだと思います。他人と会いたくない、話をしたくないのですからそれで良い。(男性：65～74歳) ・町内にはさまざまな技能や経験をもつ人材が少なからずおられると思う。そういう力を掘り起こして活動してもらえる工夫が必要ではあるまいか。 (男性：75歳以上) |

| 分類 | 主な意見 |
|-------------|---|
| 住まいに関すること | <ul style="list-style-type: none"> ・高齢化に向かっていくなかで、持ち家（空き家）の利用方法を考える。空き家を寄贈してもらって、町がうまく運営する（若い人に斡旋したりなど）。（女性：40～64歳） ・北斗にも老人達が入居できる高齢者住宅の様な物が有れば良い。知らない所へ行きたくない。（男性：75歳以上） |
| 相談体制に関すること | <ul style="list-style-type: none"> ・子どもから高齢者まで広い層にやさしく親切な活動をしているのを感じとられます。家庭のさまざまな状態に相談することで、頼れる事を希望します。（女性：65～74歳） ・町内を巡回訪問して、困っている人、困っていることを積極的に発見して、援助の手をさしのべてほしい。困っている人は自分から声を上げることはほとんどない。（男性：75歳以上） ・家族（高齢者）の相談が気軽にできるような場が役場だけではなく、各地域でも常設でなくても良いので、あった方が良くと思います。（女性：20～39歳） ・困りごとなど相談にのってくれるのは有り難いのですが、鷹栖町の職員だったり、自分の知っている人なので（守秘義務があるので、情報を守ってくれるのはわかるのですが）家庭内の悩みなどは地元の人でない方が相談しやすいと感じています。（女性：65～74歳） |
| 町内活動に関すること | <ul style="list-style-type: none"> ・20～30代の町外から転入してきた若い人たちで交流できる仕組やイベントがあると良い。子どもがいないと町内の同世代と話す機会がないので。（男性：20～39歳） ・若者のための場があると顔出しやすい！既存のイベントに行くのが少しハードルが高い気がして・・・。（女性：20～39歳） |
| 道路や除雪に関すること | <ul style="list-style-type: none"> ・冬を快適に過ごすための雪対策。除雪、排雪、各家の出入口の悩みは多くの方々が感じています。アンケート調査をしてほしい。（男性：75歳以上） ・年々排雪状況が悪くなり、車のすれ違いや歩道がなく危険な事も多々あるので、もう少し改善してほしいです。（女性：40～64歳） |
| まちづくりに関すること | <ul style="list-style-type: none"> ・20年後、鷹栖町がどのような町（人口・高齢化・少子・多死・労働人口減少など）になってるリアルな未来予想図を一目で描き、危機意識の共有を図る。（男性：40～64歳） ・課題を町民一丸となって乗り越えるためのビジョンと具体策、町民一人ひとりの役割を明確に示す。（男性：40～64歳） ・行政・社協側は、協議体やワークショップを。より住民の主体性が育まれる。（意見徴収・協議・協力を期待するだけでは、住民は自らの意見に責任を持たない行政依存の参加態度になる。）（男性：40～64歳） |
| その他 | <ul style="list-style-type: none"> ・災害時の強化対策。（男性：40～64歳） ・町外へ出て働かなくてもするように就労環境を改善してほしい。（男性：40～64歳） |

4. 調査結果の概要（中学生版）

■分析検証：北星学園大学 社会福祉学部 福祉臨床学科 准教授 畑 亮輔 氏

（1）はじめに

全世帯版の調査結果概要の「はじめに」でも述べたように、本報告書は「鷹栖町地域福祉計画」と「鷹栖町地域福祉実践計画」の作成に向けて鷹栖町の概要に関する基礎資料を得ることに目的に鷹栖町の全世帯を対象として実施した住民アンケートの調査・分析の結果をまとめたものである。しかし、このような世帯を対象とした調査では、その多くがその世帯員のうち成人以上の方の回答となる傾向があり、鷹栖町の状況を把握するための資料として成人までの町民の状況や意見などは把握できないという弱点がある。

そこで、鷹栖町に在住する年少人口の状況や意見なども把握することを目的に、全世帯対象の住民アンケートとは別に、鷹栖中学校の全校生徒を対象としたアンケート調査も実施した。この中学生版アンケートでは、全世帯版とは異なり、中学生たちの「鷹栖町への好感度」、「地域内での挨拶」、「自分にとっての楽しい場所・落ち着ける場所」「普段の生活の中で楽しいと感じること」「不安に感じていることや困っていることとその相談相手」について質問項目を設定した。本項では「いつまでも住み続けられるまち 鷹栖町」に向けて、中学生たちの回答結果から鷹栖町の状況や課題について整理していく。

（2）鷹栖町への好感度

「いつまでも住み続けられるまち」を目指すためには、その前提として町民が鷹栖町に「住み続けたい」と考えていることが重要となる。しかし、中学生の「住み続けたいかどうか」の意向は、自身の将来に関する希望など多様な要素が影響してしまうため、住み続けたいと思わないという回答があったとしても、必ずしもネガティブな回答とは判断できない難しさがある。そこで中学生版アンケートでは「住み続けたいか」ではなく、「鷹栖町のことが好きか」を尋ねる質問を設定した。

この結果、「好き」「どちらかというが好き」という回答を合わせると8割を超えており、鷹栖町に在住する相当数の中学生が鷹栖町のことを「好き」と感じていることが示された。いわゆる思春期にあたり複雑な心境を持つ中学生の8割が鷹栖町のことを「好き」と感じていることはとても重要な結果である。今後も8割の回答者が引き続き「鷹栖町のことを好き」と思えるようなまちづくりが求められている。

加えて、「どちらでもない」「どちらかという嫌い」「嫌い」と回答した中学生たちも今後は鷹栖町のことを「好き」と思えるような「安心できる・楽しい・魅力」を感じることができるまちづくりが必要不可欠といえるだろう。このようなまちづくりの方向性は、中学生だけでなく子育て世帯やその親世代にあたる高齢世帯の町民にとっても安心できる・楽しい・魅力を感じるまちにつながることが期待できるものである。

（3）地域での挨拶

多くの中学生が地域内で挨拶をしていることが明らかになった。そのなかでも、約半数が「苦手だけどしている」と回答したことは注目すべき結果である。小学生とは異なり、思春

期も始まる中学生は複雑な心境にあることも少なくない。その中で地域内での挨拶を苦手に感じつつも挨拶している中学生がこれだけいることは地域にとっての宝である。

これらのことから、挨拶をしている中学生たちが今後も挨拶しようと思えるようなまちづくり、挨拶が苦手できない中学生たちが少しでも挨拶しやすくなるようなまちづくり、さらにはそれでも挨拶が苦手できない中学生たちも町民に受け入れられるような懐の深いまちづくりを目指したい。

(4) 自分にとっての楽しい場所・落ち着ける場所

自分にとって楽しい場所、落ち着ける場所については、9割弱の回答者が「ある」と答えていた。またそれがどのような場所か尋ねた質問では「自宅・自室」が多かったものの、それ以外にも「学校」「公園」「住民センター」「体育施設」「サンホールはびねす」「北野サロン」など多様な回答が得られた。

この結果から、まちづくりの方向性として2つの重要な点が示されたといえる。まず1つが、残念ながら1割強の回答者は自分にとって楽しい場所、落ち着ける場所が「ない」状況にあるということだ。これは中学生が安心して楽しい生活を送るために必要不可欠な場所が欠如している状態であり、早急に改善すべき状況である。そしてもう1つは、1人の中学生が楽しい場所・落ち着ける場所を1か所だけでなくできるだけ複数か所持てるようなまちづくりである。

(5) 普段の生活の中で楽しいと感じていること

普段の生活の中で楽しいと感じていることでは、約9割の回答者が「ある」と答え、約1割の回答者が「ない」と答えていた。ここで「自分にとって楽しい場所・落ち着ける場所」と「楽しいと感じていること」をクロス集計してみると、「自分にとって楽しい場所・落ち着ける場所」も「楽しいと感じていること」もあると答えた中学生は約8割であり、「自分にとって楽しい場所・落ち着ける場所」か「楽しいと感じていること」のいずれか一方しかない、あるいは両方ともないと答えた中学生が約2割いた。

まずは段階として落ち着ける場所を持てるような環境づくりが必要であり、その上で楽しい場所・楽しいと感じることがあるようなまちづくりが求められている。その際、楽しいと感じることの対象については固定的な考えを押し付けるのではなく、柔軟に本人たちの視点から考えていくことが重要である。

(6) 不安に思っていることや困っていることと相談相手

アンケートの結果、回答者の約15%が現在不安に思っていることや不安に思っていることがあると回答した。その内容としては5割弱が「勉強や進路」であり、「部活動」、「人間関係」がそれぞれ約1割だった。

年齢としては不安に思っていることや困っていることがあることは十分に考えられるし、それを全て未然に防止することも不可能であろう。そこで重要なことは、不安に思っていることや困っていることがあったとしても、それを相談できる相手がいることである。しかし、不安に思っていることや困っていることを相談する人がいるかどうか尋ねた質問でも約1割の回答者が「いない」と答える結果となった。

ここで不安に思っていることや困っていることとそれを相談する相手の回答結果をクロス集計したところ、全体の約2%の回答者が不安に思っていることや困っていることがあり、それを相談する相手がいないと答えていることが分かった。また現在は不安に思っていることや困っていることがなくても、相談できる相手がいないと答えた中学生も約8%いた。

この不安に思っていることや困っていることがありながらも相談できる相手がいない状況は早急な改善が必要である。中学生であっても広く気軽に相談できるような環境を構築すること、またそれらが広く中学生やその関係者に周知されること、このような取り組みをより強化していくことが今後のまちづくりにおいて求められる。

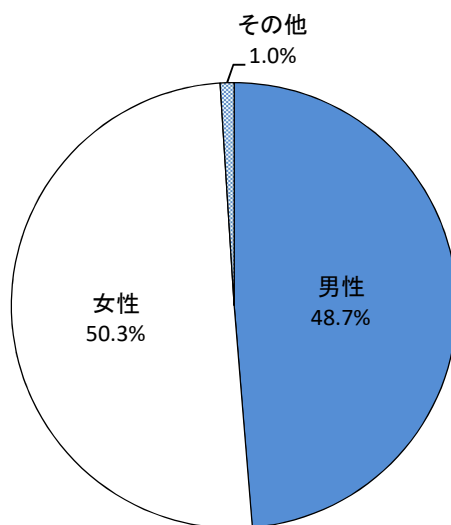
(7) 「いつまでも住み続けられるまち」に向けたまちづくりの方向性

調査結果に基づいて、「鷹栖町の好感度」、「地域での挨拶」、「自分にとって楽しい場所・落ち着ける場所」、「普段の生活の中で楽しいと感じていること」「不安に思っていることや困っていることと相談相手」をそれぞれ整理してきた。これらの結果より、「いつまでも住み続けられるまち」を目指すためには、中学生たちが落ち着ける場所や楽しい場所をもち、不安や困りごとがあっても相談できる相手がいて、鷹栖町のことを好きと思えるようなまちづくりの必要性が示唆された。

5. 調査結果（中学生版）

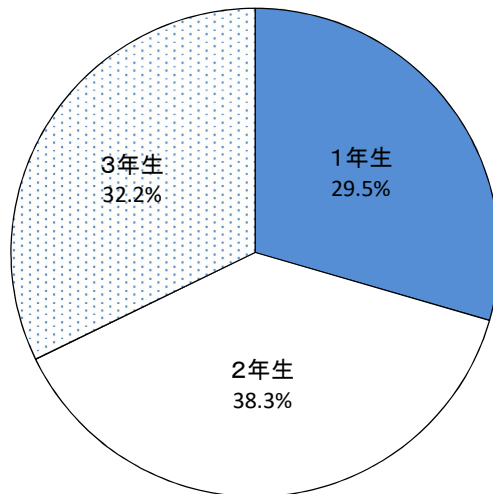
問1 あなたの性別を教えてください。（SA）

性別については、「男性」が48.7%、「女性」が50.3%、「その他」が1.0%となっている。



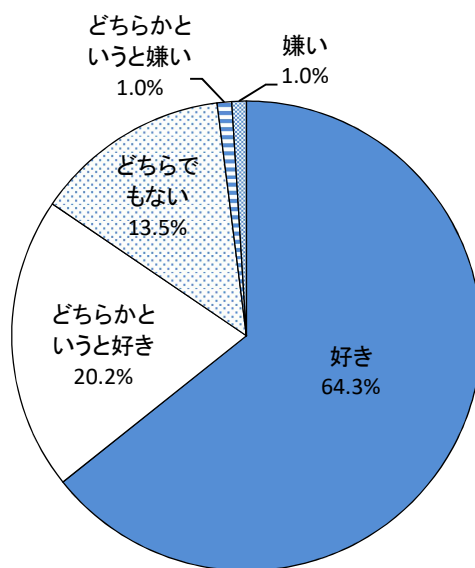
問2 あなたの学年を教えてください。（SA）

学年については、「1年生」が29.5%、「2年生」が38.3%、「3年生」が32.2%となっている。



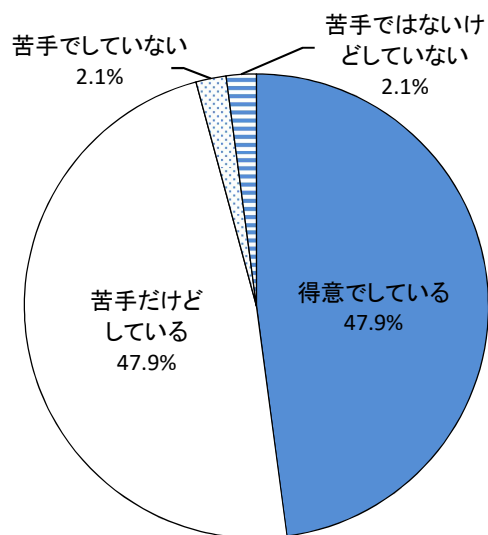
問3 あなたは鷹栖町が好きですか。(S A)

鷹栖町への好感度については、「好き」(64.3%)と「どちらかという好き」(20.2%)を合わせると8割を超える中学生が好きという意識を持っていた。



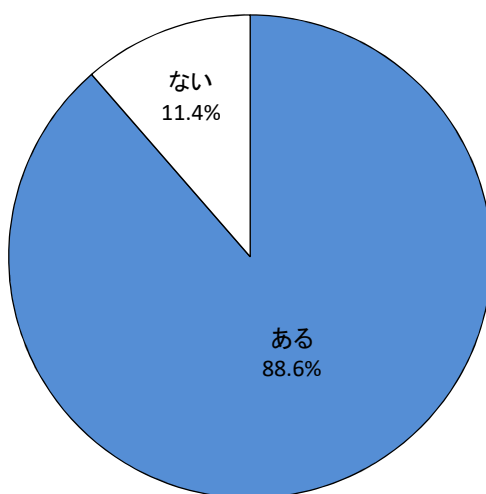
問4 地域の人との挨拶について教えてください。(S A)

地域の人との挨拶については、「得意でしている」(47.9%)と「苦手だけどしている」(47.9%)を合わせると9割を超える中学生が地域の人と挨拶でコミュニケーションをとっていることが示された。



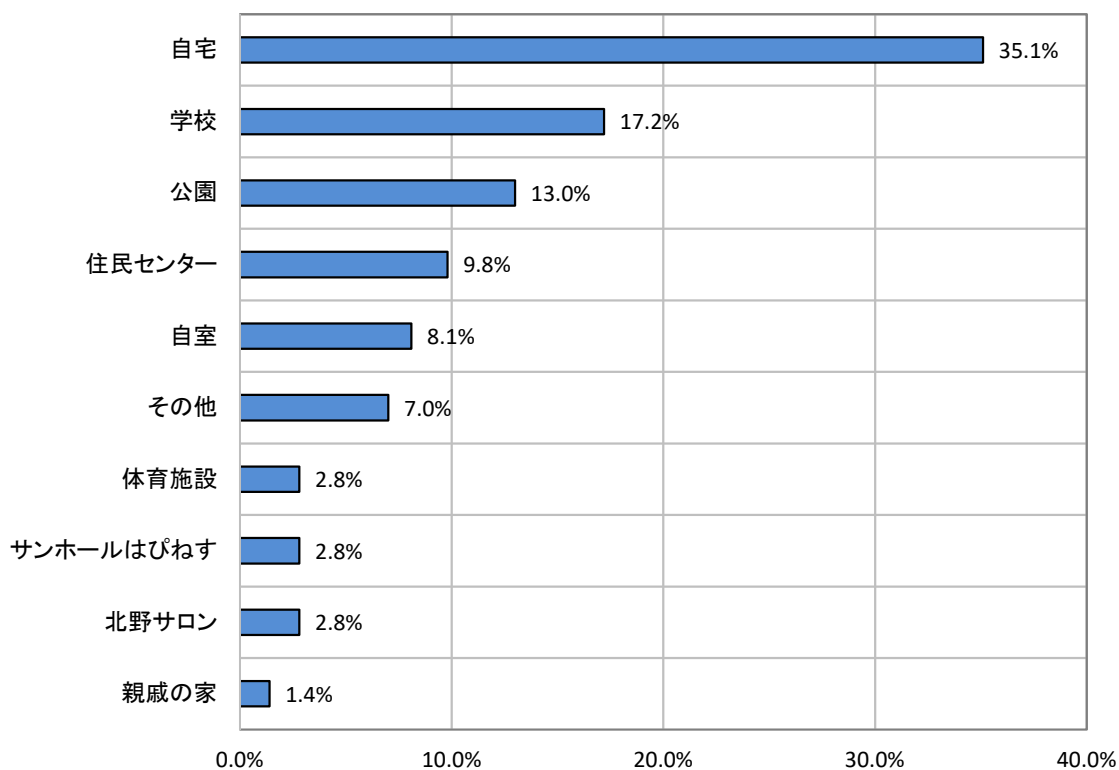
問5 あなたにとって楽しい場所や落ち着ける場所がありますか。(S A)

楽しい場所や落ち着ける場所については、「ある」が88.6%、「ない」が11.4%となっている。



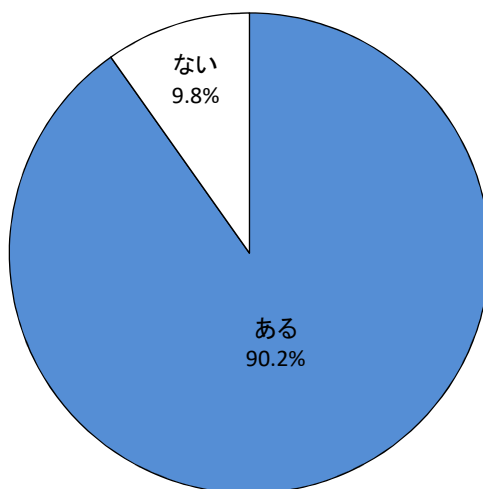
問6 楽しい場所や落ち着ける場所 (自由記述)

楽しい場所や落ち着ける場所の詳細については、「自宅」(35.1%)と「自室」(8.1%)と合わせると4割を超える中学生は自宅がその場所となっており、次いで「学校」(17.2%)、「公園」(13.0%)となっている。



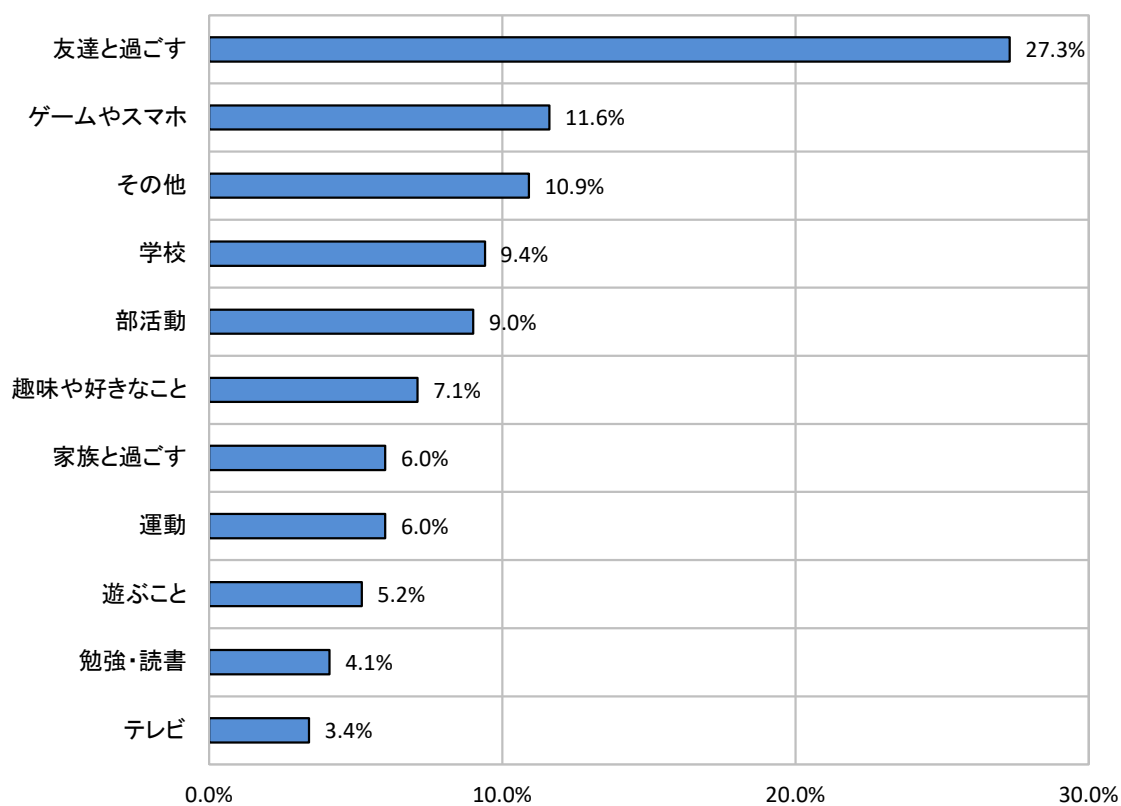
問7 あなたが普段の生活の中で楽しいと感じていることはありますか。(S A)

普段の生活の中で楽しいと感じていることについては、「ある」が90.2%、「ない」が9.8%となっている。



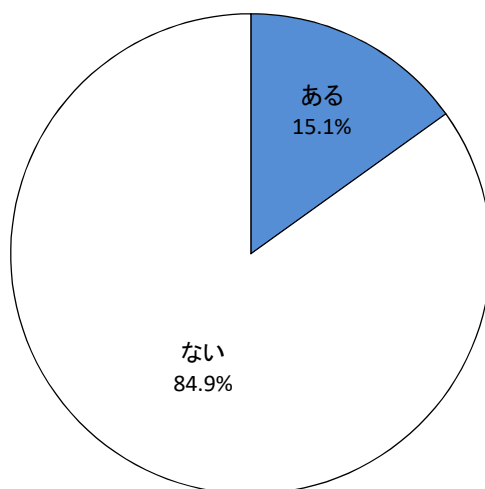
問8 楽しいと感じていること(自由記述)

普段の生活の中で楽しいと感じていることの詳細については、「友達と過ごす」が27.3%と最も高く、次いで「ゲームやスマホ」が11.6%となっている。



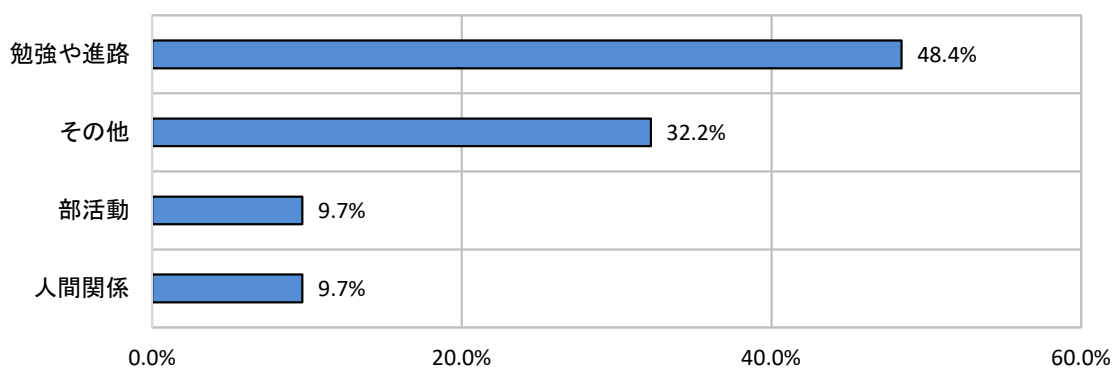
問9 今あなたが不安に感じていることや困っていることはありますか。(S A)

今、不安に感じていることや困っていることについては、「ある」が15.1%、「ない」が84.9%となっている。



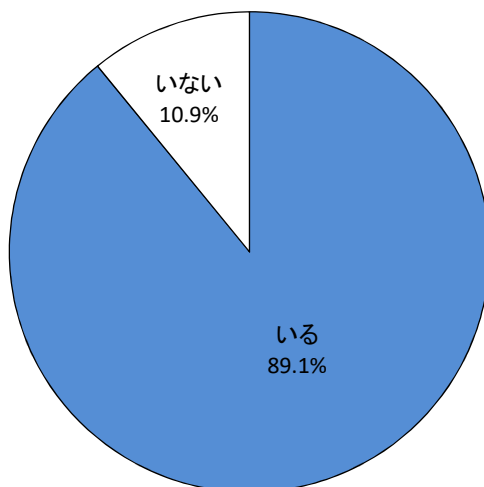
問10 不安に感じていることや困っていること (自由記述)

今、不安に感じていることや困っていることの詳細については、「勉強や進路」が48.4%と約半数を占めており、約1割の中学生が「人間関係」で悩みを感じていることが示された。



問 11 あなたが不安に感じていることや困っていることを相談する人はいますか。(S A)

相談する人については、「いる」が89.1%、「いない」が10.9%となっている。



問 12 相談する相手 (自由記述)

相談する人の詳細については、「友達」(34.1%)となっているが、「父母」(24.8%)、「家族」(13.7%)、「兄弟姉妹」(3.9%)、「祖父母」(2.1%)を合わせると、4割を超える中学生が相談する相手として家族を挙げている。

